
トライルプレイヤー！

MABOROZUKI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トライルブレイザー！

【Nコード】

N3785Q

【作者名】

MABOROZUKI

【あらすじ】

人類の惑星移民船団が惑星ドラコに漂着して300年。先住知的生命体ドラコンとコンタクトを果たす。安住の地を提供してもらった人類はドラゴンと共に惑星開拓の一步を踏み出すのだった。しかしドラゴニウムというレアメタルをめぐりお互いが対立。戦争が勃発して30年。その険しく激動する世界での中を生きる青年ロイド。人型機動兵器トライルブレイザーに搭乗し開拓の最前線の辺境の地で巨大危険生物を駆除するハンターを生業としていた。隣のフロンティアコロニーに物資を運ぶトラックの護送中ドラゴンと遭遇。口

イドは自分でも予期しない運命と時代の渦に巻き込まれていくのだ
った。

始まり

ズシ、ズシ、ズシ・・・

深い森の中を3つの大きな影が移動していく

影の主は手には銃、背中には斧、槍や剣といった武器をそれぞれ背負っていた。

その体は角ばっているところが多く生物とは似ても似つかわしくない・・・

トライルブレイザー (t r a i l - b l a z e r 通称TB) 呼ばれる人型機動兵器である。

未開地などで道しるべとなるように通った道に目印をつける者 開拓者という意味をもつこのTBは、

ここ惑星ドラコで生活していくためには人類にとってはなくてはならないものだった。

主に土木工事などの重機として使われるが、戦闘用としての活用を余儀なくされるのもここ惑星ドラコならではの。

「ふああ〜。」

3体の中の黒いボディカラーのコクピットの中でロイドは両手を後ろに挙げてあくびを一つ。

もうかれこれ3時間、ずっと薄暗い木ばかりで思わずあくびが出てしまったのだ。

「おい、ロイド気を抜くんじゃねえ!」

「おっと、わりい」

先頭に行く濃いブルーのTBからマイクホンに通信が入った。

・・・確か名前はダンだっけ?・・・

今回の仕事のパートナーの名前を思い出す。パートナーといっても今朝あつたばかりなのだが。

ロイドはぐるつと頭部に付いたモノアイカメラを使い周囲を見渡すと背後には荷物を積んだトラックとその後ろにグレーのTBがモニターに送られてきた。

そう、いまはこの3人でトラックを護衛し、隣の開拓村フロンティアコロニーに無事に届けるその途中だった。

「結構楽だと思って受けた仕事なんだけどな、こつも退屈だと逆に疲れる」

そう口にながらも何も起こらずにすんなり終わってくれ、と思うのが本音だ。

いつ脇の森の中から巨大生物が飛び出してくるかわかったものではないからだ。

はるか故郷地球の優に10倍を誇る惑星ドラコは環境こそ地球と大差ないものの、その大きさゆえにここの生物はまったく異なる進化を遂げていた。

人畜に被害を及ぼす生物も少なくなき、日々危険と隣りあわせのなか人類はすでに300年この惑星に住み開拓している。ロイドは正直人類つてすごいと思う。

しかしこの過酷な環境のためにいまだ人類の手はその全体を把握するのに遠く及ばない。

・・・この間もどこかのコロニーが巨大生物によって壊滅したんだっけ・・・。

モニター越しに通り過ぎていく木を見送りながらそんなことを考えていると

「そろそろ森を抜ける。」
グレーのTB、タツグから通信が入った。

森を抜けるとそこは切り立った崖だった。

「その崖沿いの坂を下りて川沿いに進めばコロニーだ」

「ならさつさと行こうぜ、早く冷たいビールが飲みたいぜ。」

トラックの運転手からの通信にダンがもう仕事は終わったとばかりにみんなをせかした。

坂を丁度半分折り返えたところだった。

ビービービー、

突然コクピットの中にエマーゼンシーの音が鳴り響いた。

「西の上空から高速で接近してくる3つの巨大生命反応を確認、距離2000」

タツグの声に、光学望遠カメラで確認するとたしかに赤、緑、白の点を確認できた。ぐんぐん近づいてくる。

「こ、このスピードは、ドラゴンだ！」

みんなに戦慄が走る。

「待ち伏せを食らったてわけか、こんちくしょうめ！」
ダンの憤る声が聞こえる。

「森に逃げ込もうにも、ここじゃUターンできない！」

ロイドは退路を探すが周りには切り立った崖と岩壁しかなかった。

「しかたねえ、しんがりは俺とロイドが務める、タツグはトラックを護衛しろ！行け！」

ダンの指示に、トラックはスピードを上げて坂を下りていく。

それを尻目にロイドは覚悟を決めて手にはめたガントレットを握り締める。そして

セーフティロック解除！

頭にあるサークレットがロイドの思考を読み取りTBの手にあるライフルのセーフティーを外す。

もうすでに300の距離まで近づいていたその姿にごくりとつばを飲む。

大きな翼を持ち鋭い爪の付いた四肢をもつ頭に2品の角を生やしたその姿は正に地球史のおとぎ話にでてくる伝説のドラゴン、真にそれだった。

ドラゴン・・・

人類がこの惑星ドラコで初めてコンタクトを取った先住知的生命体だった。彼らはその容姿からは想像ができないほど、ものすごく穏やかな性格で慈愛に満ち、宇宙を漂流してきた人類を暖かく迎えた。そして人類にとって過酷なこの星に安全な居住地を提供し、そればかりでなくこの星で生きていくのに惜しみない協力をしてくれたのだ。いま人類がここでこうしていられるのもドラゴンの力添えがあつてこそだったのだ。

人類はその地に惑星中央政府を建立、開拓の拠点としてドラゴンと共に新たなその一步を踏み出した。しかし、ドラゴンの骨からドラゴニウムというレアメタルが発見されたのを期に、お互いの関係は一変してしまった。

開拓によってどんどん発見される未知の物質のなかでも無限の可能性と多様性を秘めたドラゴニウムはまたたく間に人類の心を驚づかみにした。そしてドラゴンの骨だけから取れるという希少性とそれによりましての需要の向上によって価値はあつという間に上昇し、今までは屍から取っていたが、一攫千金を夢見てわざわざドラゴンを密漁して骨を手に入れる者まで現れ始めた。そしてとうとう度を越した人類に対してドラゴンの長が怒り悲しみの果てに、人類に対して

全面戦争を宣誓。惑星中央政府は事態を収集しようとしたが時すでに遅く、応戦するしかなかった。そうしてもう30年過ぎようとしていた。

「先制された！」

先頭の白色ドラゴンの口からゴウゴウと火球がうちだされこっちに向かってくる。

ロイドはすばやく左肩を前に突き出すようにイメージした。

それに反応し、TBの左肩に付いたシールドが展開され、ガードの姿勢をとる。

直撃はしなかったものの、背後の岩壁が吹き飛び砂埃を上げる。

「ええい、こなくそ！」

ダンのTBがその青いボディを硝煙につつませながらドラゴンに向かってマシンガンをぶっぱなす。

ズガガガガガ

しかし、ドラゴンたちはあぜ笑うかのようにその弾をひらりと空中でよけていった。

ロイドもライフルで応戦するが、ただ無駄に空の薬莖を増やすばかりだった。

こつもひらりひらりとかわされてはまったく当たる気がしない。

ハンターを生業として幾度となくこの惑星の大小様々な生物と渡り合ってきたロイドだったが、ここまで素早くそして無駄のない動きをするものと戦うのは初めてだった。

もちろん知識と写真でドラゴンはどういうものであるかは知っていた。

が、

実際に対峙することで、その知能の高さと強さを痛いほど実感した。

2度目の火の球プレスを白いドラゴンが打ったときだった。

緑色のドラゴンが坂を下っていくトラックに気がつきそれを追おうとした。まだ底に着くには距離がある

「そつちには行かせねえ！」

それを見たダンが弾が切れたライフルを谷底に放り投げ背中を斧に手に取るとバーニアをふかして崖に躍り出て緑色のドラゴンに切りかかった。

ガキーン

かばうようにして立ちふさがった青いドラゴンが前脚に付いた爪で斧の刃を受け止める。

これ幸いと緑のドラゴンはトラックを追う。

「まだ、俺がいるぜ！」

ロイドはTBの背中のバスターと呼ばれるダンピラの剣を前に突き出すように構えるとバーニアをふかし緑のドラゴンに突撃した。

しかし捕らえる前に今度は白色のドラゴンに前をさえぎられてしまった。

尻尾をムチのように振るう。ロイドはそれをかわそうとして身を捻ろうとした。

しかしここは空中！。

ロイドの思念に機体が反応できず思うように動かない。

が
い
い
い
い
ん

剣を使ってその尻尾を受け流そうとしたが、体制が不安定なこともあり、受け流しきれなかった衝撃がコクピットを揺さぶる。モニターに各駆動系に生じた異常箇所が映し出され、それを知らせるアラートがビービーと鳴った。

「うああああ」

横を見ると崖に押し付けられたダンのTBがドラゴンに足と片腕を引きちぎられていた。

「ダンー！」

助けに行こうにもこっちは尻尾の攻撃をしのぐので手一杯。

「ダン、脱出するんだ！」

ロイドは必死に声をかける。

「くそ、そうしたいんだが、ハッチがゆがんじまって開かねえ。」

ガシガシとコクピットに噛り付き、鋭い牙でこじ開けようとするドラゴン

「ふ、俺もここまでのようだな、まあビールは天国で飲むとするか。」

「ダン、何言ってるんだ！」

「ドラゴンがここまで強いとはな、正直お手上げだぜ。でもな、でもえも道ずれだこの糞ドラゴン！あの世でたっぷりお酌しやがれ！」
ぐっとドラゴンの首に回したTBの手の中には手榴弾が握られていた。

次の瞬間、激しい爆発音と共に爆風がロイドを包み込んだ。

「ダンー！」

と、バーニアが活動限界を迎えTBがガクンと降下する。

「やばい！」

とっさに腕を伸ばし掴んだのは、爆風にあおられ体制を崩した白色のドラゴンの尻尾だった。

ギャウウウ

突然のことに叫ぶドラゴン。

ロイドを振り払おうとしたが、激しくたたきつける爆風で逆にもつれ合ってしまった。

必死になってロイドを引き剥がそうとドラゴンはもがくがうまくいかず、体制を崩しロイドの乗ったTBもろともに谷底に落ちていく。「く、くそう……」

急降下を知らせるアラートが遠ざかっていくのを感じながらロイドの意は闇に沈んでいくのだった。

始まり（後書き）

初作品の初投稿です。いろいろ御指導、ご指摘いただけたらうれしいです！

頑張って連載していくので宜しくお願いします。

ファーストコンタクト（前書き）

白色のドラゴンと共に崖下に落ちたロイド。奇跡的に助かるもののTBは故障。途方にくれるロイド。仕方なく近くのコロニーを目指すその途中で金髪碧眼の少女と出会うのだった。

ファーストコンタクト

「う、いたた……。」

ロイドは暗闇の中で目を覚ました。

ボーっとする頭を振って何が起こったのかを思い出そうとした。

ドラゴン、爆音と爆風、そして掴んだ尻尾……

……そうだ自分はそのままあの白いドラゴンと絡まって落下したんだ。……

ズキン

落下の衝撃で痛めたのか、体のあちこちが痛い。しかしその痛みがまだ死んではない事を教えた。

……ダン、……

仕事終わりに一緒に冷たいビールを飲むはずだった、今朝あったばかりのパートナーの壮絶な死様に心が痛んだ。

そのほとんどが未開な惑星ドラコ。特に辺境では常に死と隣り合わせだ。さっき会ったドラゴンを始めとして、人類を脅かす生物は多い。

最もドラゴンとの不仲は人類が原因なのだが……。

ロイドはとりあえずトライルブレイザー通称TBを動かそうとガンレットを握り締めると同時に動け、

とサークレットを通じて命令を伝えた。

しかし、いくら命じても、ガントレットを動かしても反応がない。モニター横に備えられているスイッチを押して再起動を試みたが、まったく反応がなかった。

仕方なくガンドレットとサークレットを外す。

シートに備え付けのベルトを外すとハッチを調べ、開閉のスイッチを押してみる。メインスイッチが入らないので当然自動では空かない。

手動開閉レバーに手をかけて一気に開けようとして手が止まった。

「まさかな・・・」

ロイドはある考えに至ったのだ、もしも崖の途中でひっかかるとしたら・・・

つつーと冷や汗が頬をつたった。

今一度重力を確かめることにして後ろを振り返る。地面と平行なはずのシートにサークレットが乗っているのを見て、どうやらコクピットの入り口は下に向いてはいないらしい。

少なくともハッチを空け手そのまま落下はない。
あとはハッチを開けた拍子に引っかかりが外れてTBごと落下・・・。

「まあ、どのみち、ここにいてもいずれは餓死するんだ。」

再度レバーを握りなおし、思いつきりハッチを開け放った。

たひらたひらたひら

水の流れる音とともに目の前に日の光を浴びてキラキラと川が流れているのが見えた。地面も発見し、

助かった……。

とりあえず落下死の危険を間逃れたロイドはコクピットシートの後ろから食料の入ったリュックと上着そして作業用のゴーグルを引っ張り出した。

本人曰くトレードマークのゴーグルを額の少し上のところまで引っ掛け、上着を着てリュックを背負うと腰のホルダーのガンスライサーを確かめた。

ガンモードとブレードモードの両方を持ち合わせたガンスライサー。小さいころに見た「開拓戦士フロンティマン」という特撮アニメの主人公が持っている武器、剣にも銃にもなる、無敵の武器。アニメと違って、それ一つでドラゴンや巨大生物を倒せないということを除けば、まったく同じだ。

そしてこれはロイドの父の形見でもあった。ロイドにとって武器以上にお守りでもあった。

「よっと」

TBは足を投げ出すようにして座っていたために、地面にすんなりと降りることができた。

垂れ下がった前髪を書き上げるその横顔には少年の面影がほんの少し残っていたが、その瞳には潜り抜けてきた苦勞と困難を物語るような鋭い眼光があった。

後ろを振り返ると崖の岩肌を背もたれにして座っている黒いTBがあった。日の光を反射して頭部が光る。左肩のシールドと左脚のモ

モの部分を守るスカートがなくなっていた。他にもボディのあちらこちらに擦り傷や凹みが出来ていて崖にぶつかりながら落ちていったことを物語っていた。

上を見上げるとはるか上に四角い青い空が見える、崖の半分まできていたはずだが、上で見たときはまだ谷底まで結構あつたはずだ。

・・・よくこれで済んだものだ・・・。

ゾツと背筋がさむくなりそれ以上は考えるのはやめにした。そして気持ちを落ち着かせるためにリュックの中から水筒を出すと一口含んだ。

「ふう、さてこれからどうしようか」

バリバリと頭をかいて一時考えた。この辺境の地でTBも動かない今、助けがくることは無に等しい。

万が一あのトラックが無事に着いていたとしてもいやあの激しい戦闘の後だ、しばらく戻ってくることはないだろう。それにこのままここにいても、日がくれたらもつと危険だ。夜の水場は夜行性の猛獣がうろつく。闇にまぎれて活動するやつらは狡猾で素早い。

「とりあえずさつき向かうはずだった、フロンティアコロニーまでいくか」

腰のポーチから方位磁石を出す。

「確か崖は北のほうがくだりになっていたはずだ・・・うーん、こっちか。」

川に沿って北に歩き始めた。

しばらく歩くと人が倒れているのをロイドは発見した。

駆け寄ってみると髪の毛の長い女性がうつぶせに横たわっていた。金色の髪に見慣れない幾何学模様の入った民族衣装のようなものをまとっていた。

・・・この先のコロニーの住民だろうか・・・

ロイドはリュックをおろすと、それを枕にして仰向けに寝かせた。

呼吸と脈があるのを確認するとあらためてその顔を見つめた。目を

閉じたまま苦しそうに眉をよせているその顔はまだ幼さがのこっているもの整った顔立ちには気品が漂っていた。
きつと笑ったらすごく綺麗でかわいいのかもしれない……。顔に付いた髪の毛を払おうとしたが、金色の髪の中から出てきた耳を見て手が止まる。

「とがった耳……」

それはこの少女の正体を教えるものだった。

……ドラゴン……

おそらくさつき戦っていた3対のうちのいずれかだろう。そういえばと、ロイドは思い出す。ドラゴンは普段人間と変わらない姿をしていて、移動や有事の再に変身するということ……。思わず腰のホルダーに手をやって確かめてしまった。

「うっ……」

ドラゴンの少女が目を開けた。

「大丈夫か？」

とりあえずロイドは声をかけながら顔を覗き込んだ。

まだぼんやりとしているようだ……。碧い瞳をしばいている。

そして鼻をヒクヒクさせて……

突然、カッと目を見開いたかとおもうと思いつきりロイドを突き飛ばして立ち上がった。

「ニンゲン……」

ロイドを警戒した目で睨んでくる。ロイドも思わず身構えた。

「くう。」

しかしすぐにその少女はぐずれるように座り込んでしまった。

ロイドは近づこうとしたがすぐにその青い瞳で睨まれる。

「近寄らないで！」

どうやら脚をいためてるようだった

はいずつて逃げようとするその民族衣装のスカートの裾から赤く腫れた足が見えた。

ロイドはポーチから四角い白いものを取り出すと少女に近づくと。

してその腫れた部分を覆うように貼り付けた。

「な、何をするの!」

おびえと絶望の色が瞳に移る。しかし次第にそれが驚きと戸惑いの色に変わる。

「応急処置程度だが、それでも結構楽になるはずだ」

ロイドはリュックを空けると中から携帯食料を取り出し放った。

思わずキャッチするのを見ると、フィルムをはがして中身を頼張るすると恐る恐るドラゴンの少女は口を開く。

「どうして?」

「俺が食いたかったから、お前さんも腹減ってなら食べな、毒なんか入ってないからさ。」

ロイドは水筒を一口あおった。

「いや、そうじゃなくてどうしてニンゲンのあなたが、ドラゴンのあたしを助けるの?」

「助ける?どうしてかな。」

少し考えると、ロイドは眉をひそめる少女に水筒を渡しながら言った。

「俺はTBを失っておまけに一人ぼっち、お前さんは足に怪我して歩けない。お互い困ってて、しかもこんな辺境で人もドラゴンもなくないか?」

そういいながら納得いかない顔にロイドは手を差し出した。

「どうだ、歩けるか?もう少し先に行くとコロニーがあるはずなんだ。日がくれたらここは危険だ。そこまで一緒に行こう。」

少女は差し出された手につかまってもいいものなのかと思ひ悩む。

ザバーン!

いきなり川の中から黒い影が飛び出してきた。

ロイドは少女を背後にかばいながらホルスターからガンスライサーを引き抜き銃口を向けた。

グルルル

ワニのようなとんがった大きな口と背中には硬そうな甲羅を背負った生物がそこにいた。

タートルアリゲーターと呼ばれる、四足歩行のそいつは全長4メートルぐらいで若干大型だった。

恐ろしく獰猛で口に入るものなら何でも噛み砕いてしまう。

そして背負う甲羅はTBの装甲の材料にもなるくらい硬い。

カキューン、カキューン、カキューン

ロイドはトリガーを引くが撃った弾は案の定その甲羅にはじかれてしまった。

クレエエエエエ

ロイドをあぜ笑うかのように鳴いた。

ザバーン、ザバーン

新たに2匹のタートルアリゲーターが飛び出してきた。

ガチガチ鋭い歯を鳴らしてこれから食ってやるぞとばかりにロイドたちを威嚇する。

「くそ、こつちだ!」

リュックを掴むと反対側の手でドラゴンの少女の手を握って逆方向に走り出した。

「コロニーに入ってしまったら大丈夫だ!」

しかし必死に走った先に見えたのは、ロイドが乗り捨てた黒いTBだった。

今来た道をひきかえしてしまったのか……

しかし気がついたときはすでにとき遅し、後ろからはその巨軀からは想像できないスピードで3匹が迫ってきていた。

「あっ」

少女が転んでしまった。

「もうだめ、」

ロイドはおもむろに抱きかかえると、TBの中に入りハッチを閉めた。

ハア、ハア、ハア、

二人の荒い息がコクピットに響く。

思わずTBの中に逃げ込んでしまったが、このままでは八方ふさがりだった。いずれこの中から引きずり出されるのも時間の問題だろう。

「足大丈夫か？」

フルフルフルとひざの上で頸を振る少女、どうやら限界らしい。

「こいつはもう動かないし、いつ引きずり出されるかわからない。

一瞬でもいいからドラゴンになって追っ払えないか？」

最後の希望にすぎる思いで聞いてみる。

「駄目、パワーが足りない……。」

と頭をうなだれた。

「畜生、せめてこいつが動けばあのくらいなら蹴散らせるのに……」

念のためとガントレットとサークレットをつけて起動を試みるもやっぱり反応がない。

「ここでおわりかよ！畜生！」

ダン！と、こぶしを肘掛にたたきつける。

ガチンガチン、

外から挑発するように歯をかみ合わせる音が聞こえてきた。

「いざとなったら、俺がおとりになってやつらを引きつける。その間に這ってでもいい、出来る限り遠くに逃げるんだ！」

ロイドはホルスターからガンスライサーを抜き取ると、弾の残弾数

を確認し始めた。

すると少女は意を決したように首からネックレスを外してロイドに手渡した。

「これを使って！」

そのネックレスには四角柱の水晶が三つ付いていた。

「これをつかえても、とんがっているから武器にはなりそうだが、やつらにはまったく歯が立たないぜ！」

「そうじゃない、こうやって使うの！」

少女はモニターの角にネックレスを引っ掛けると手をかざしてささやいた。するとその中の一つが輝き始めた。

ブウォン

突然、今までうんともすんとも言わなかったTBのモニターが動き出したのだった。

「どうということだ・・・」

目を疑うロイドの瞳に、今にも飛び掛ってきそうな位置にいるタートルアリゲイターの画像が飛び込んだ。

そしてその中の一匹が飛び掛ってきた。

とつさに体をひねるイメージを送って、今までにないその反応の速さと軽さにロイドは驚いた。

しかし今は戦闘中、頭を素早く切り替えて各所の状況をチェック。あれだけの崖を落ちてきたのだからと覚悟はしていたが、オールグリーンとまではいかないものの、戦闘をするには十分だった。

「これならいける！」

ガントレットの中のコぶしを握り締め、モニター越しのタートルアリゲイターを睨む。

「何か武器はないか・・・」

武器一覧を呼び出すが一つもなかった。サブウェポンは搭載されているのだが、それらはすべて失ったシールドに搭載されていた。

飛び掛ってくるタートルアリゲイターをよけつつ何かないかと、あたりを検索すると、だんびらの剣バスターがその柄を川の中から突き出していた。

「あつた！」

ロイドはTBを剣に向かわせた。

ザバーン！

いつの間に川に入っていたのか、一匹が勢い良飛び出してロイドたちへ飛び掛ってきた。

「食らうかよ！」

勢いのまま、ズサーっとす、飛び出してきた影の下をスライディング、柄をつかむと剣のその広い腹を使っておもいきり救い上げた。ごろんと仰向けになり、ジタバタともかくタートルアリゲイター腹側にバスターを突き刺す。

ブシュー

腹の甲羅はおもったよりも柔らかく、血を噴出しながらもずぶずぶと刺さっていく。

クレレレエエエ

力尽いたのを確認して、ぐったりとしたその体から剣を引き抜く。

ガチンガチンガチン

仲間を殺されて怒り狂ったタートルアリゲイターが歯を鳴らしながら迫ってきた。

グレレレエエ

残った2匹のうちの片方が身を躍らせてTBの足に噛み付こうとしてきた。

「あらよつと！」

さつとかわし、ガチンとかんだ顎を足で踏みつける。そして一閃、TBの腕がひらめいたかとおもつと、タートルアリゲイターの首と胴がすっぱりと分かれた。断末魔を上げることなく事切れた。

ブオン

剣についた血を振り払うと最後の二匹に向かって剣を構えた。

すると、それを見た最後の一匹はくるつと身を翻すと川の中にはいり、ものすごい速さで泳いで去っていつてしまった。

ふうー。

とりあえずの危機が去りホッと胸をなでおろした。

それもつかの間、ビービービーというエマーゼンシーの音と共にロイドたちを巨大な影が覆った。

モニターに映し出されたそれはさっきロイドたちを襲った緑色のドラゴンだった。

「くそ、」

剣を構えなおすロイドに膝の上のドラゴンの少女が静止をかけた。

「大丈夫です。ハッチを開けてください」

今度は自動で開いたコクピットから少女は顔を出す。それを見たドラゴンはTBの前に静かに降り立った。

「立てるか？」

よろめくその姿にロイドは手を貸して彼女を支えた。

「忘れ物だ」

ドラゴンの差し出してきた手に乗り移ろうとした少女の首にロイドはそつとネックレスをかける。

プツン、

胸元に来た水晶でいまだ光っているものに手をかけ、はすしたそれをロイドに手渡す。

「これは・・・」

困惑の面持ちのロイドに

「ドラゴンは受けた恩を仇で返すようなことは決してしない」

と青い瞳でじつとロイドを見つめながら静かに言った。

最後にと、ドラゴンの手のひらに座り込んだ背中にロイドは声をかけた。

「ロイドだ、俺はロイドって言うんだ、君の名前は？」

夕暮れに焼けた空に飛び去っていくドラゴンの姿をモニター越しに
ロイドはつぶやいた。

フリーユール

それは去り際に笑顔と共にドラゴンの少女が残した言葉だった。

それぞれの時間

ドラゴンの少女フリユーレと別れた後、無事にロイドがフロンティアアコロニーに着いたのはすっかりあたりが暗くなつてからのことだった。

谷間のフロンティアアコロニー『フォールキャニオン』 岩壁にぽっかり明いた洞窟の中にあつた。

入り口は岩に偽造した合金の扉で、トライルブレイザー通称TBのセンサーなければ気がつかないほど巧妙に隠されていた。

TB格納庫に誘導されたロイドは、そこで作業している人たちを見て今度こそ本当に緊張を解くことが出来た。

「今日は本当に大変だったな・・・。」

ロイドがTBから降りると一人の男が駆け寄ってきた。

「あ、あんた生きてたのか！」

よく見るとそれは、今回護衛してきたトラックのドライバーだった。頭に包帯を巻いているがどうやら無事に到着することが出来たらしい。

「あんたたちのおかげで、何とか荷物を無事に運ぶことが出来たよ。」

ロイドは今までのことをかいつまんで説明した。あんなことがあつた後だ、ドラゴンの少女フリユーレを助けたことは省いてだ。

「そうか、ダンさんもか・・・。」

と、目を伏せる。

いくら死と隣りあわせが日常だといつても、雇った側として後味が悪かったに違いない。

「ダンもつてことは、・・・そういえばタッグは？」

もう一人のグレーのTBの操縦者を思い出す。確か護衛としてトラックについていったはずだ。

「なんとか入り口までは来れたんだが、追ってきたドラゴンにこのままではコロニーの場所がばれてしまうからと、困になってそれから・・・」

フリーユレを迎えに来た緑色のドラゴンを思い出す。いまだ帰ってこないということはタッグは無事ではないだろう。

「まあ、なんにせよ、あんただけでも無事でよかったよ。今回は事が事だけに、出来るかぎりのことはさせてもらうつもりだよ。何でも言ってくれ。」

沈んだ雰囲気振り払うかのように男は努めて明るく声を張った。じゃあ早速とばかりに、ロイドは今降りたばかりの黒いTBを振り向いて

「こいつの修理を頼めないか？どうやら限界だったらしい。ここに着いたとたん、全機能が止まっちゃったんだ。」
とポケットの四角柱の水晶を確かめながら言った。

ここに着くとそれまで輝いていた光が消えて、それと同時に崖下に落ちた時と同じ状態に戻ってしまったのだった。

「そうだ、倒したタートルアリゲイターの甲羅がTBの背中に縛つてあるから良かったらそれも使ってくれ。」

「わかった。まあ、じゃあとりあえずこっちで食事を用意してあるから来てくれ！」

歩き出し、着いてくるロイドを振り返り男は

「他に何か欲しい物はあるかい？」

その言葉にロイドはニカツと笑い言った。

「冷たいビール！」

くとき同じくして、そのころ

「フリユール、お入りなさい」

緑色のドラゴンに乗って帰ってきたドラゴンの少女フリユールは、足の手当てを終え一息ついたところで、族長に呼び出されていた。

部屋に入ると、数人が火をおこした囲炉裏のようなものを囲むようにしてに座っていた。

「ただいま戻りました。」

お辞儀をすると、フリユールはここに座れとばかりに空いた席に腰を下ろした。

「お帰りなさい、フリユール。足の具合はどうですか？」

正面のフリユールと同じ金色の髪と青い瞳を持つ女性が口を開いた。

「はい、だいぶ良くなりました、お母様。」

他よりも一段高い族長の座に座る母親を見ながら、フリユールは答えた。

「それはなにより。ザガンもちよつと怪我を負ったけれど、みんな無事で戻ってきてくれて本当に良かったわ。」

「ザガン、ああ、無事だったのね。」

青いTBの凄まじい爆発に巻き込まれた仲間の安否を知ってホッと胸をなでおろした。

「ところで話は変わるのだけれども、そういえばあなたは人間と一緒ににいたそうですね？」

青い目を細めながらフリユールに尋ねる。

・・・やっぱりその話になる、か・・・

一瞬どう話そうかと迷ったが、正直に話す覚悟を決めた。

「はい、谷底で倒れていた私を助けてくれたんです。」

フリユールは気絶していた自分を介抱し、足の怪我に手当てをして

くれて、タートルアリゲイターから守ってくれたことを事細かく話した。

「そう。」

話が終わると、しばらく目を閉じ、そして再び目を開くとフリーレを見つめながら言った。

「今回は事が事だったから仕方ないけれど、これからは更に人間に対して警戒しなくてはいけません。かつて私たちの祖先は、人間がこの星にやってきたとき、彼らを迎え入れ、この星に住めるように手を差し伸べお互いに仲良く暮らしていました。しかし、彼らはそんな私たちに恩を仇で返すような、どれだけ酷いことをしてきたのかあなたも知っているでしょう。もちろん、すべての人間がそうであるとは言いませんが……、彼らがどれだけ貪欲で残酷であるかということを決して忘れてはいけませんよ。」

無言で頷くフリーレに

「さあ、今日は初めての任務と実戦で疲れたでしょう。もう下がってゆっくり休みなさい。」

とねぎらいの言葉をかけたのだった。

部屋に戻り、明かりを消すとフリーレは重力に引っ張られるままベッドに取れこみ顔をうずめた。

……本当に今日はたくさんの方がありすぎて、頭の中がぐちゃぐちゃだぁ……

カサッ

息苦しくなって身を起こそうとすると、服のポケットに何か入って

いるのに気がついた。

なんだろうと取り出すと四角いものが出てきた。

「これは、あのかの……食べ物だっけ？」

透明なフィルムに包まれたそれをじつと見る。タートルアリゲイターに襲われてとっさにしまいこんだのを思い出した。

「お母様は、ああいつてたけれど……」

手の中にあるそれを見ていると、ふとある言葉を思い出した。

……「ドラゴンも人間もないだろ？」……

そういつて自分をドラゴンだとわかっていたのにもかかわらず、必死になって助けようとしてくれた青年のことをフリーユレは思い返した。

パフン

ベットの上で仰向けになると両腕を真横に広げるようにして投げ出す。

広がった金色の髪が窓から差し込む月の光に照らされてキラキラと輝く。

胸元に目をやると2つの四角柱の水晶が付いたネックレスあった。

……3つのうちの1つをあげたんだっけ……

そしてあのかのときは気にもしなかったが、TBの中で膝の上に抱きかえられ、そしてその青年の胸にしがみついていたことを思い出して、急に顔が熱くなるのを感じた。

「あたしっしたら、なに考えてるんだらう」

ふるふると頭を振って火照りを冷やす。

はあー

目を閉じて深く息を吸い込み、そして吐く。

頭を空っぽにしようとしてじつと自分を包み込む静かな闇にに耳を澄ま

した。

ようやく溜まっていた疲れが出てきたのか、だんだん頭がボーっとしてくるのがわかった。

……そういえば、名前なんていったけ、うーんと……

「ロイド、だ」

なんとか最後に思い出した青年の名前をつぶやくと、フリーユレの意識はまどろみの中に溶けていくのだった。

再開

ロイドはサークレットという脳波測定器を頭にかぶった。動け！という念を送り、歩くイメージを起こす。

ガイン、ガイン

それに呼応するかのように黒い巨人は前に向かって一歩、二歩と前に向かって歩く。次に腕にはめたガントレットを操り、腕部の動きと感触も確認する。

「いつも通りの動きだ」

周りに人がいないのを確認して、背中に背負った、だんびらの剣バスターを構えると、軽く素振りする。

「どうだい、調子は？」

外から修理を担当したTB専門技師が声をかけてきた。

「ばっちりだ！」

ロイドはハッチを開けると技師に向かって親指を上に見上げた。

あれから数日、ロイドは自分のTBの修理のためにフロンティアコロニー、『フォールキャニオン』とどまっていた。

いつもはロイド自身がTBの整備や修理をするのだが、たまたまトライルブレイザー通称TBの製造元Zui-on社の技師が立ち寄っていて、ドラゴンと戦って戻ってきた機体を是非に見たいとお願いされた。

そしてそのお礼にと修理までしてくれたのだった。

「本当にタダでいいのか？フレッド」

「ついでじゃから、気にするな。」

一仕事やり終えたと、満足げに、フレッドはくわえたタバコに火をつけて深く吸い込みむふうーと紫煙を鼻から噴いた。

「それにしても、またえらい旧式じゃな」

「ああ、親父のお古だからな。これでも色々自分でカスタマイズはしてるんだぜ。」

と、自分の黒いTBを見上げる。タバコの白い煙がその色を引き立たせる。

「まあ、たしかに大事に使っているのは伝わってきたわい。」

「それに新しいTBを買う余裕なんて今の俺には全然ないしな。」
自分のTBに手をかけながら困ったようにロイドは言った。

「まあ何も新しいければいいってもんじゃないわい。何を、いつ、どう、使うかじゃよ。」

ニツ、と笑いながらフレッドはそう言うと、短くなったタバコを足でキュキュツと踏み消した。

「じゃあ、わしはそろそろ行くかな。すまん、送って行ってやれなくて。」

「いや、フレッドがこれから行くコロニーは、俺が戻って行くほうと逆方向だから仕方ない。それに帰り道でもわぬ収穫があるかもしれないしな。」

「わははは、たくましいな。」

転んでもわらを掴んで立ち上がる、それがハンターだ。

「じゃあ、こいつらはもっていくぞ。」

Zui-on製新型高速飛空挺デア・ブルグ号にグレーのTBの残骸とTB専用斧が積み込まれていく。

あれから、あたりを搜索したところ、コロニー入り口から2キロ先で見つかったものだった。本社持ち帰ってリサイクルするらしい。

開拓が進みどんどん資源は増えていつているが、どんなものでも使えるものはリペア&リサイクル。ネジー本でも無駄にはしない。

乗り込む前に、ロイドとフレッドは握手を交わした。

「これも何かの縁だ。もしも中央都の本社に寄ることがあったら是非尋ねてきてくれ。じゃあ、達者でな。」

「ああ、ありがとう。フレッドも元気で！」

ぐんぐんと飛空艇は空高く舞い上がっていつてやがて点になって空へと消えていった。

「さて、俺もそろそろ行くか！」

フレッドを見送ったあと、コロニーでお世話になった人たちに挨拶をし、ロイドは『フオールキャニオン』を後にしたのだった。

たいした収穫はなかったが、ロイドは無事に拠点とするフロンティアアコロニー『ドウム・スピロー』に到着することが出来た。

平原にあるここ『ドウム・スピロー』は、そこを流れる運河の中州に本陣を構え、それを囲む分厚く高い壁によって猛獣や氾濫した川の水から人々を守っていた。

また、運河を利用した交易が盛んで、他のコロニーに比べ、人も物も豊富で活気付いていた。それ以上に自分の父親たちが開拓し作ったこのコロニーは、ロイドにとって自慢であり、また誇りだった。

ロイドは、TB格納庫にTBを収納すると、コロニーの中央にある『ギルド』に向かった。

ギルドはコロニーの自治を担う中枢であり、コロニー内外の治安だけでなく、人が集まりやすいためにいち早く情報を仕入れることが出来る。そしてまた仕事の依頼斡旋なども請け負っているためハンターのロイドにとっても重要な場所だ。

まだ日は暮れていないが、ギルドに続く道は人通りが多く夕飯の買出しや仕事帰りの人たちとすれ違う。道の脇に立ち並んだ家の煙突からは煙が立ち上り、美味しそうな香りが漂ってきた。

にぎわう露店街をぬけ、その奥のギルドに付くと、ロイドは右奥のカウンターに向かった。

コンコンコン

『仕事係り』と書かれた板をたたくと、キィと椅子のこすれる音がし、ぬつと禿げた頭出てきた。

「ファン爺、戻ったぜ。」

「おお、ロイドか。聞いたぞ、大変だったんだってな。」

ロイドの際出したカードを受け取ると、ピーっと機械に通し、ぬつと節くれだった手でまた返してきた。

報告終了！。

事務的手続きはそれで終わった。

報酬はすでに依頼主に貰っていたため、本当はそこで仕事は終わりで。報告したからといって追加報酬が出るわけではない。

だが、戻ってきたときは報告するのが礼儀というも。また報告することにより、間接的ではアルがお互いの情報交換にもなるため、暗黙の了解になっていた。

「ドラゴンとやりあったって聞いて心配したぞ。」

ファン爺はロイドの父親とは古いなじみで、昔から何かとロイドを気にかけてくれた。

「ああ、ダンとタッグがやられちゃった。」

「そうだってな。残念なことだ・・・。」

ロイドにとって初対面だった彼らも、受付をするファン爺にとっては見知った間柄なはずだ。危険と死と隣り合わが日常だとしても、ファン爺の声からは悲しみが感じられた。

「まあお前さんだけでも無事でよかった。」

「まあな、でも俺もTBが故障してり大変だったんだ」

「でも修理は終わってるんだろ？まあTBが無事でも中身が死じまったら元もこうもないけどな。」

わはははと笑うファン爺に、

「ところでファン爺、話が変わるんだが、いつもよりコロニーの人が多い気がするんだが、俺の気のせいかな？」

ロイドはさっきから気になっていた違和感を確かめるためにファン爺に尋ねた。

「ああ、惑星中央政府からお役人さんやその護衛のTB部隊がきているだよ。何でも、北東の山脈地帯で鉾山が発見されたらしい。」
「禿げ上がった頭を撫でながらファン爺は答える。」

「鉾山か……。」

「まあいずれ、機材の運搬や護衛などの依頼がくるだろうから、そのうち行く機会があるかもな。」

ロイドはファン爺と別れると、次の仕事を物色しに仕事以来掲示板に向かった。めぼしい依頼の書かれたのを何枚かその束から取っていく。仕事は受付に申請して初めて受理されるのもなので、難易度や期限に関わらずとっていく。

「次はどれにしようか……。」

そう思案するロイドは後ろから肩をたたかれ振り返った。

「よお。ロイド！聞いたぜ、ドラゴンとやりあったんだって！よく帰ってこれたもんだ。」

「ほんつと、つくづくお前は悪運が強いよな！」

そう声をかけてきたのは、ハンター仲間のライとポーンだった。二人とは歳が近いという事もあって何度も仕事を共にした仲だ。その二人の顔を見るとロイドの顔に笑みが浮かぶ。

3人はギルドの中に設けられたバーに肩をお互いに組んで向かう。

「さあ。ロイドの生還と、我々の再開を祝って、かんぱーい！」

持ったジョッキをお互いにぶつけて勝ち鳴らし、一気に喉へと注ぎ込む。キンキンに冷えた黄金の水は喉ではじけ、泡となり体中に染みわっていく。

……ああ、帰ってきたんだ……

ロイドがようやく身も心も開放された瞬間だった。

「そうか、ダンのおっさんは逝っちゃまったんだな。」

「ああ、目の前でドラゴンもろとも……。」

ライはダンとは何回か組んだことがあったらしく、死んだことを聞

くと遠い目をして思いにふけた。

ライが黙ったのをみて、今度はボーンが

「俺はタツグとよく組んでいたんだが、あいつも、・・・そうなのか？」

「ああ。直接死に際を見たわけじゃないが、その後見つかったTBがあんな状態じゃあ、万が一つにも生きてはいないだろう。」

「そうか・・・」

ボーンも黙る。

シーーーーーン

と3人は黙りこくってしまった。

ちびちび飲んでいると、突然ライが大声を出した。

「うおおーし、今夜はダンとタツグの分まで飲んで飲んで飲み明かすぞ！かんぱーい！」

「ほら、ロイドもどんのめえ〜！ボーン、一気だあ〜！」

すっかり暗くなった外をバーの窓からはライの声と光があふれ出した。

夜はまだまだ始まったばかりだった・・・。

「ただいまあ〜ケプツ」

ふらふらになってロイドが自宅に帰ってきたのは夜も白んだ明け方だった。

ギィ

扉を開けるとフィーンと何かが近づいてきた。

「あらまあ、ロイドお帰りなさい」

優しい声でロイドを出迎えたのは、ブルーのアイランプを点滅させたお手伝アンドロイドのマリアだった。

メイド服をあしらったボディに、頭部のツインテールに髪を縛った

ようなピコピコ動く二つの耳と、発音器から流れる女性の声から女性型アンドロイドだということがわかる。

反重力という技術で移動するため脚部はなく、メイド服裾から出たツルンとした球面を下に地面スレスレに浮いていた。

「マリア、ただいま。」

そういいながら上着をテーブルの横の椅子の背もたれにかけるとどかっと座る。

「水ー」

「はいはい」

そう言うのであると、マリアはすでに持ってきた水の入ったカップををロイドに渡す。

ごくごくごく……ふい〜。

一気に飲み干し一息つく。

「ロイド！帰ってくるの遅いぞ！」

マリアの胴体から今度は元気はつらつとした声が、オレンジのアイランプの点滅と共に聞こえてきた。

「ああ、レイ、ただいま。ボーンとライのやつに、飲まされちゃつて、あたた頭が痛い。」

頭を抱えるロイドに

「ロイド、飲みすぎ注意。」

とピンクのアイランプがランプが点滅。

「くそう、久しぶりに飲んじゃった。ソフィア、げんきにしてたか？」

「明日、絶対二日酔い。」

「もうロイド、本当に心配したんだからね、何日も家を空けて、おまけにドラゴンに襲われたんだって？マリア姉なんか、同じ洗濯物をそのまま五回洗濯しちゃったんだぞ！ちゃんと謝れ！」

「もう、レイったら、恥ずかしいから内緒にしておいていったのに。」
「恥ずかしそうにブルーのアイライトをピカピカさせた

「いや、本当に悪い悪い。でもお前たちの声を聞くと本当に我が家

に帰ってきたんだと心底感じるよ!」

そう頭をぐりぐり撫でると、アイランプをブルー、オレンジ、ピンクに点滅させながら

「あらあら、まあまあ、」

「ごまかすなー」

「むうー」

三種三様の答えが帰ってきた。

そう、これは一体のアンドロイドの中に3つの人工知能が入っているのだ。

昔、ロイドが父親にどうしてこんなのかを聞いたところ、にぎやかだからいいじゃない、とあっけらかんとした答えがかえってきた。

早くに母親をなくしたロイドのために、ある日父はアンドロイドをどこからともなく用意してきた。しかし再婚しなかった父は、一人っ子のロイドが寂しくないようにしたかったんだらう。

今でさえも高いアンドロイドだ、母親と兄弟、遊び相手と三体用意は出来なかったのだらう。それでもと、一体で3つなんてむちゃくちゃな考えだが、どうかしようとしたその父の愛情をロイドは痛いほど感じている。

そんな父が亡くなってかれこれ10年、ロイドにとって彼女たちはまさにかけがえのない大事な大事な家族だった。

「もう、限界〜うい〜つくねるわあ〜」

自分の部屋の扉を開け、脱皮するかのように服を脱ぎ真っ裸になるとどーんとベットに仰向けになっ
て
くお〜

高いびきをかき始めた。

「いたずらしちゃおっか」

「あらまあ、だめですよ」

ロイドの裸に手を伸ばし、いたずらをしようとするレイをたしなめ、
マリアはロイドに布団をかけた。

そして今さつきロイドが脱ぎ散らかした衣類を拾い始める。

コトン、

ズボンを拾うとしたときにポケットから何かが転がり落ちた。

「落し物、発見。」

ソフィアが拾うとそれは透明な四角柱の水晶だった。とんがった両端の片方に丸いリングが付いていた。

ピンクのアイライトが水晶に反射した。

「お土産かな？」

とオレンジのアイライトを点滅させながらわくわくする、レイ。

「さあ、まあとりあえず洗濯しなくちゃだから、しまっときましよう」

胸にある小さな備え付けの収納をあけると、丁寧にしまっ。

「さて、おせんたく〜おせんたく〜」

久しぶりの洗濯物にどこかうれしそうによるこびこびこ耳だか、お下げだかを羽ばたかせるマリア。

そして次の日、ロイドはソフィアが言ったとおり二日酔いで寝込むハメになったは言うまでもなかった。

ロイドが故郷『ドウム・スピーロー』に戻ってきて3ヶ月、あれ以来ドラゴンと遭遇する事もなく、TBに乗って辺境の地を駆け回り、順調に依頼をこなしていく毎日を送っていた。

そんな、ある日・・・

「さて、どこだ？」

今回の依頼は『タケキノコの採取』だった。なぜロイドがキノコ取りを引き受けたかというと、その報酬が高かったからだだった。なぜ高いかというと、独特の食感と共に表現が出来ないその美味しい味もさることながら、その生息地が生息地だったためである。

ロイドが今いるのは『ドウム・スピーロー』から北東に行った、人間とドラゴンの勢力圏のぎりぎり境目の山間だった。ドラゴンばかりでなく、いまだに未知の生物が多い森の中は深い木々が立ち並び、あの日の護衛を思い出しそうになる。

しかし今回は、あのときとは違い、単体行動。危険だとももつたらさっさと逃げる事が出来る。

ロイドはいつ襲われてもいいように、TBに載ってせつせと木の根っこ辺りを覗き込んで丁寧に落ち葉を掻き分け、探す。

「これが、あつたぞ！」

腕のはめたガンドレットを使ってTBの握力を伸長に調節しながら右手でゆっくりと地面から発見したものを引き抜いた。

「タケキノコ、ゲットダぜえ〜！」

かれこれ3時間、当てもなく森をさまよい、やっとお目当てのものを見つけたロイドは、年甲斐にもなく勝どきをあげた。そう、確かこれは昔見たテレビアニメ、辺境でかわいい妖精を見つけ手なづけ、ポケットに常に忍ばせては、ライバルたちと見せ合いその可愛さを競う「ゲッチュー・フェアリー」の主人公の少年が言っていた名台詞だったことを思い出した。マリアたちがものすごくこのアニメを気に入っていて、本当のところロイドは裏番組の「TB戦記」を見たかったのだが、常にテレビを先取りされてしまい、強制的に見せられる羽目になったのだ。

……マリアたちの熱狂振りは異常だったな、確かあの胸の収納にそれぞれが気に入っている妖精のフィギュアが一体ずつ入っ

ていたはずだ……。

周りから見ればアンドロイドがフィギュアを？とおもつかもしれないが、ロイドはそんな考えにはまったく至らない。家族愛というものだ。

マリアたちのことを思い出し、早く帰ろうとせつせとタケキノコを探すのだった。

「2、4、6……18よしもう十分か。」

TBの左手に入ったタケキノコを数え終わると、袋を縛り辺りをさつと確認してハッチを空けると袋ごとタケキノコをコクピットに入れる。

「12本だったから、あまりの6本はマリアにでも料理してもらおう」

焼いてもよし、煮てもよし、炊き込みご飯にしてもよしのこのキノコは肉厚でジューシーなのだ。前に一度だけ食べたその味を思い出し、よだれが出て来そうになった。

「よし、今夜はライとポーン、ファン爺も呼んで酒盛りだ！」

今からなら、日の入りまでには間に合うだろう、あたしを警戒しながらいそいそと帰路に着く。

ビービービー

突然、エマーゼンシーのアラーム音と共に、モニターにリーダーの捕らえた2つの生命反応が点滅する。遅れて、森の向こうから紅蓮の炎が上がるのが見えた。

「あの炎はドラゴンの？何かと戦ってるのか？」

残量エネルギーと背中のだんびらの剣バスターを確かめると、炎の上があったほうに向かった。

ロイドがたどり着いた場所は森の中にぽっかりと空いた空き地だっ

た。

少しはなれたところからモノアイに付いた望遠カメラで覗くと、ドラゴンと・・・若干形は違うがあれもドラゴン？とがお互いに牙と爪を躍らせて戦っていた。

ドラゴンのほうは白い色だった。もう片方は茶色のような山肌のような色をしていた。

「まさか・・・。」

ロイドは3ヶ月前に出会ったドラゴンの少女を思い出した。

・・・フリユレ・・・

いやいやと頭を振る。ドラゴンだって人間と同じように何体もいるのだ。白色のドラゴンなんて5万といるだろう。

・・・だが、もし彼女だったら・・・

手助けをしたほうがいいのかどうかと迷っていると、それまで均衡していた戦局が一気に傾くのを見た。

同時にブレスを吐き、真ん中で火球がぶつかり合いはじけ飛ぶ。しかし、その勢いが激しすぎて火の粉が白色の竜の目に入ってしまった。

キシャアアアー、

苦しそうにもがき目を押さえる姿を見た岩肌色のドラゴンが踊りかかる。

気配でよけようとした白い背中に、鋭い爪が突き刺さり赤い鮮血が舞う。

そしてさらに、よろめきながら空きになった白い首筋に鋭い牙で追い討ちをかけようとする。

ぐぐぐ・・・

何とか前脚でその顎を掴み押し返そうする白色のドラゴン。しかし、傷が痛むのか、どンドン前脚が逆に押され始め・・・そしてとうとう押し倒されてしまった。

グアアアアアアアアアア！！！！

白い顎と胸を押さえつけこれから噛み付こうというのだろうか、ひとときわ空に向かって高くその黒い口を上げてほえる

ロイドの頭の中に突然、あの日夕日の中で名前をささやきながら微笑んだフリーユールの顔が浮かんだ

パンツ、とはじかれるようにして背中ของバスターを構えると、ロイドはバーニアを全開にして森の中から飛び出した。

「うおおおおりゃあああ」

無意識のうちに雄たけびを上げて、今その白い首に噛み付こうとしていた茶色の首に向かって、剣を振るう。

「はあああああ！！」

斬！！！！

気を込めて振った腕に確かな手ごたえがあり、それと共に、かっとう見開いた目はそのままに宙に舞う頭が見えた。

どすん

何が起こったかわからないまま息を引き取ったであろう、その岩肌のような巨体は背を地にして倒れこんだ。

ビービービー

コクピット中はバーニアの強制冷却を知らせるアラートが鳴り響い

た。

はあはあはあ

無意識に一瞬にして飛び出していったために、息があがり、心臓がバクバクしていた。

息を整えながらも背中に気配を感じ、アラートの音を切って後ろを振り向く。

すると目の前に白いドラゴンが立ち上がっていた。さっきの戦闘で体のあちこちに怪我はあるものの、その眼光は鋭かった。

「くそ、」

あわてて剣を構えようにも、腕が震えておもうように握れず、杖のように地面に突き刺して片膝を付く。

グリーンとTBに顔を近づけてくる。モニターいっぱいひろがったドラゴンの顔を見て、

・・・「だめだ、やられる」・・・

噛身砕かれるとおもい目を瞑る。

「来るなら来い！」

いつ来るかとその瞬間を、早くくるなら来いと思ったが、いつになってもその瞬間は訪れなかった。

「う、う？」

おそろおそろ目を開けると、ドラゴンはTBに鼻を押し付け、クンクンとにおいを嗅いでいた。

・・・そういえばフリーユレも最初あったとき、においをかいでたっけ・・・

外部マイクのスイッチを押すとまさかと思いつつもきいてみた。

「もしかして、フリーユレ、か？」

急に音がしたために驚いたのだろう、びくつとその白い首を引っ込める。

「あ、あ、俺はロイドだ、ほらあの谷であった。もしかして、あ、いや違ったらわるいんだが・・・フリーユレか？」
なぜかどぎまぎして口がうまくまわらない。

グルルル・・・

低くうなると目を細めるドラゴン。

バシュツ

体が光ったかとおもうと、はじける様にしてドラゴンの輪郭がはじけ飛ぶ。

光が収まると、今までドラゴンが立っていたであろう場所に人がたっていた。

「フリーユレ、か・・・？」

金色の髪に青い瞳、とんがった耳とそして独特な民族衣装。あつたときの格好と特徴を思い出すが、現れた姿はまったく違っていた。そこには羽の付いた兜に鎧をまとった姿があった。まるで北欧神話に出てくるワルキューレのような格好をしていたのだ。
おもむろに兜に手をかけると

ふさあああああ

キラキラと日に照らされ輝く金色の髪が、狭い兜の中からはじけるようにして広がった。

瞬きをしたまぶたの間から青い瞳が見えた。そして言った。

「ロイド、久しぶり」

予兆

「ロイド、久しぶり」

今まさしく目の前にいるのは、3ヶ月前、谷底で助けたドラゴンの少女フリーユレだった。

前とは違い、金色の髪をなびかせ、その身を鎧に包んだその格好は凜としていた。

ロイドはガントレット、サークレットを外すとトライルブレイザー通称TBから降りる。

山間だけあって上着のジャケットを羽織っただけでも少し肌寒い。しかし今のロイドには不思議と寒さを感じなかった。

「や、やあ、フリーユレ、大丈夫か？」

目の前のフリーユレを、まじまじと見つめながら、口から声をしぼり出す。

「ええ、本当に危なかったわ。おもった以上に強くて、油断してたの。でも、またあなたが助けてくれるなんて……」

「そういえば、お前、傷負ってるんじゃないか？背中とか、ポーチをまさぐり、白い四角い布を出すとロイドはフリーユレに近づく。

背中を見ようとぐつと近づくとロイドにフリーユレは驚き戸惑った。

「え、あ、ロイド、なに？」

「いいから、ほら見せるって、どこだ？」

「あ、え、ちょ、ちよつと、まって、きゃあ」

金色の髪をどかし背中を見ようとしたロイドを思わず両手で押しや

る。

か細い腕はそこまで力はないが、フリーユレの抵抗に1、2歩下が
る。

「あ、ごめん。」

おもわず同時にあやまる。さああとゆれた髪からのぞいたフリー
ユレの頬は少し赤かった。

そして

ぷ、ふっ、ふふふ、あはははは

どちらともなく笑ってしまった。

ようやく打ち解けたところで、ロイドはもう一度フリーユレに言っ
た。

「いや、さつき背中とか血でてたからな、他にもいろいろ。痛まな
いのか？」

心配そうにするロイドに

「ああ、あれはあたしであってあたしでないから、」

と答えると、あ、しまったという顔をするフリーユレ。

「あたしであって、あたしじゃない？」

「え、あ、うんとね、なんと言うか……。ほ、ほら、変身すると
性格が代わるって言うか……。でもほら怪我してないから。」

くると背中を見せるようにしてターンするフリーユレ。ふわりと
舞い上がる金色の髪の毛の仕方から鎧が見える。鎧には傷が一つも
付いてない。

上半身と腰の境目絡みえる下地にも血がにじんでいる様子はなく。
どうやら本当に怪我はなさそうだ。

「まあ、怪我がないってならそれでいいんだけどさ。でも痛いとい
ろがあつたら、遠慮なくいってくれよ。」

そういつて前も足に張ってもらった布状の物をパタパタ振るロイド

「ありがとう。」

と嬉しそうにフリーユレは答えた。

・・・なんか話をごまかされたような気もしたが・・・
それよりもロイドはフリーユレの着ている鎧が気になった。

「前は着てなかったよな、それ、」

「うん、お母様が、『あなたは本当に怪我がたえないんだから』って、作ってくれたの」

「へえ、そっか、でもすごく似合っていていいぞ」

似合っているといわれ、うれし恥ずかしそうに照れながらフリーユレは微笑んだ。

ロイドはコクピットシートの後ろからリュックを出して座る。

フリーユレもロイドの隣に座った。

「でも、ロイドどうしてあなたはここにいるの？」

リュックから取り出した水筒をあおるロイドにたずねた。

「ああ、ちよつとタケキノコを取りに来てたんだ。ほら」

キノコがたくさん入った袋を、見せる。

「高く売れんだよな。これ」

「いくら高く売れるからって、ここはもうあたしたちの支配領域よ？そんな危険を冒してまで手に入れる必要があるの？」

あきれ顔のフリーユレ。

どうやらキノコを探しているうちに境界を越えずいぶんドラゴンの領域内に来ていたらしい。

「ま、ハンターの性ってやつかな。でもそのおかげでフリーユレにまた逢うことができたしな。」

ニカッとロイドは笑うその笑顔に、

「も、もう、あたしだったから良かったものの、他のドラゴンだったら今頃はどうなっていたことかわからないんだからね！」

フリーユレは頬を染めてぷいっと顔を背けた。

「いや、わりいわりい、次からは気をつけるよ。」

ロイドはその癖のある頭をバリバリとかいた。そんなロイドを見て
「うふふふふ、もう、ロイドだったら、次から気をつけてよね。」

「そうだな、気をつけるよ。あははは。」
と二人は笑う。

「そういえば、咄嗟のことであおしちまったが、こいつもドラゴン
なのかな？」

首を失い肉塊となったそれをロイドは指差した。

「いいえ、これはデイノサウルって言っただけど、私たちドラゴン
とはまったく違うわ。元は同じ種だったって言う説はあるけれどね。」

「そうか、俺には見分けがつけがたいんだが・・・」

「まったく違うわよ、もう、あたしたちをこんなのと一緒にしないで、
ほら、こことか・・・」

フリーレは怒ったように形のいい眉を吊り上げ、一つ一つその違
いを説明していった。

「それに、デイノサウルは言葉だってわからないんだから！あたし
たちとはまったく違う生き物よ！それにあたしたちにとっては、こ
いつらは不吉の予兆なの。」

「わ、わるかったよ。で、フリーレはどうしてこいつと戦ってた
んだ？」

「それなんだけど・・・」

「どうしたんだ？」

「このデイノサウルは本当はもっと高い山脈とかに住んでいて滅多
にこんなところにきたりしないの。」

「まよいでたのかな？」

「それならいいんだけど、ここ最近、多くの目撃例があつて、あた
したちの仲間も何人が被害があつたの。で、その真偽を確かめるた
めに巡回してたんだけど、運悪くばったり出くわしちゃって・・・。」

「

「こいつらの住んでる山脈ってあそこか？」

とロイドは後ろのそびえる山脈を指差した。

「ええ、でもなんで？」

そういえばと、ロイドはファン爺の言葉を思い出す。

「北東の山脈に鉦山が見つかったんだってさ」

たしか今は・・・と考え込むロイドの顔をフリーレが心配そうに見つめる。

その視線気がつくくと、

「ああ、実は3ヶ月くらい前にあのむこうの山脈で、鉦山が見つかったらしくてな、いまは中央惑星政府が管理して採掘してるはずなんだが、もしかしてそのせいもあるか？」

しかし首をよこに振り

「なら、なおさらここにはこないわ。だってそこには沢山の人間がいるんでしょう？それなら逆にえさに困らないし、ここまで出てくることはないわ。」

さらりと恐ろしいことを一うフリーレに苦笑いをするロイド。

「ははは、えさか。たしかにな。でもあんなのが俺たちのコロニーに飛んできたら困るな。」

「そういえばロイドって、どこのコロニーに住んでいるの？」

「ドウム・スピローだ。」

「あの運河にある？ふうんそうなんだ。」

「知ってるのか？」

「え、あ、うん。ちょっとね。それに、あそこは大きいもの。」

「フロンティアコロニー『ドウムスピロー』、こちら辺では結構大きい部類に入る。」

「そうなんだよな、それにあそこは俺の親父が開拓したコロニーなんだ。」

遠い目をして今は亡き父に思いをはせる。

「・・・仕事を終えて帰ってくると出迎えた俺の頭をぐりぐりしてくれたっけ・・・。」

でもどうして今こんなことを思い出したんだろう……。ふと横のドラゴンの少女をみる。西の空に傾いて赤みがかった日の光をあびて光る髪の手先を、指でもてあそんでるその姿をみて、こんな辺境のしかもドラゴンの地であるのにもかかわらず安らぎを感じた。

「……まるで家にいる時のようだ……」

「家か……」

「家？」

首をかしげ聞き返すフリーユレに、

「そろそろいかないとな、日が暮れる前に戻らないと……」

パンパンとズボンに付いた土を払う。

「そう……」

どこか残念そうにフリーユレはうつむく。

立ち上がったロイドは、何かを思いついたようにTBのシートの後ろから袋を取り出した。

「どうしたの？」

ロイドの行動にフリーユレはたずねた。

「こいつの情報は、俺たちのコロニーにはないんだ。フリーユレのおかげで大体の事はわかったんだけど、一応サンプルをね。」

腰のホルダーに収められたガンスライサーを抜くとブレードモードに切り替え、鱗ごとディノサウルの肉を切ろうとした。

ガリガリガリ

「あ、つくそ、こつちのほうじゃ欠けちゃった。」

ひびの入った刃をみて困ったロイドの視線の先に、すっと棒のようなものが差し出された。

「はい、これを使って。これはあたしたちドラゴンの名工が鍛えたものなの。」

それはフリーユレの腰に吊るしてあった剣の柄だった。

「おう、いいのか？ わりいな。じゃあ、ちょっと借りるぜ。」

剣を手に取り目の前に掲げ眺めると、その輝く刃を凄みをロイドは

感じた。

軽く片手で振るい感触を確かめ終わると、ロイドは肉塊に向かって剣を構える。

すつと肩から力を抜いて剣を正眼に構える。イメージを大事にするTBで剣を使っているロイドだ。

その構えは堂に入っていた。

その姿を見て、ほうっーと見とれてしまうフリーユレ。

「はぁ！」

硬いうろこに向かって、ロイドの腕と剣は綺麗に弧を描いた。

何の抵抗もなくふりぬく手ごたえに、

「空振りしたか？」

しかし次の瞬間、鱗の表面にすーっと線が走り

ぽとっ、

綺麗な切り口を残して鱗と共に肉片が地面に落ちた。

「すごい切れ味だ……。」

素直にロイドは驚いた。

そして、ロイドはサンプルを袋にしまう。

「ありがとうな」

フリーユレに剣を帰そうとした、そのときだった。

「ごぉー」

突然大きな黒い影が二人を包んだ。

「さがしましたぞ、フリーユレ様！」

「まったく、あれほど先に行かないでくださいと何度言ったらわかるんですか！」

バサバサと翼をはためかせて焦げ茶色と緑色の、2体のドラゴンが降りてきた。

「オルガ！ ロツシュ！」

見上げ、声をかけるフリーユレ。

その背後に、身構えるロイドに気がつき、2体のドラゴンはくわつと目を見開いき威嚇する。

グルルル

いつでもロイドに飛びかかれるようにと体制を整えた。

「二人とも待つて。」

フリーユレは手を広げて静止をかける。

「しかし、このにおいは・・・そいつは人間ではありませんか？」

焦げ茶のドラゴンが声を荒げる。

「ほう、おまえは・・・あのときのやつか？」

緑色のドラゴンがロイドを見て言う。

「そ、そうなのオルガ、彼よ。」

「しかし、これはどういうことですか、フリーユレ様、なぜ人間がこの我らドラゴンの地に？」

いるはずのない人間がここにいることに不快を表すオルガ。

「キノコを取りに来て間違つて入ってきてしまったらしいわ。」

フリーユレはロイドをかばうように言う。

「そうか、ならば人間よ、さっさとこの地を去れ。本来ならばかみ殺してやるところだが、お前には借りがある。見逃してやろう。さあ、行け！」

オルガは緑色の体を一步踏み出す。

「そんな言ついい方をしなくても・・・」

フリーユレ言い返そうとすると

「族長がおっしゃられたことをお忘れですか？フリーユレ様。人間は恐ろしい生き物だってあれだけおっしゃっていたではありませんか！」

焦げ茶のドラゴンはフリーユレを諭すように言う。

「で、でもねロツシュ、彼はわたしがディノサウルに殺されかけていたところを危機一髪で助けてくれたの！」

ぐ、こげ茶色のドラゴンのロツシュは押し黙った。

しかし今度はオルガがその緑色の巨体を揺らして口を開いた。

「ふん、人間風情が、たかだか数回フリーユール様を助けただけではない気になるなよ。それに、フリーユール様、この人間の乗るそのトライルブレイザー、ドラゴニウムが使われているんですぞ！そのドラゴニウム欲しさに人間たちは我々ドラゴンを殺していることを、知らないわけではないでしょう。」

・・・ドラゴニウム・・・

ドラゴンの骨に含まれるという無限の可能性を秘めたレアメタル。TBをはじめ、今ロイドたちが使っている電子機器のいたるところにつかわれていた。かつては、友好関係を結んでいたドラゴンに提供してもらいそれを使っていたのだが、その多様性から需要が増え、数が足りなくなり価値が高騰。一攫千金を得ようと生きているドラゴンを狩る者まで出てきたのだ。それに怒ったドラゴン達は全面戦争を宣誓。そして、今現在のように見かければ戦を仕掛けるという犬猿の仲になってしまったのだ。

「そんなことは知ってるわ、でも、でも、」

ひっしに言い返そうとするフリーユールの肩にロイドは手を置いた。

「フリーユール、ありがとう。でも、もういいんだ。」

「ロイド・・・。」

「そもそもドラゴンの支配域に入ってしまった俺の不注意がいけなかったんだ。だから、」

「ううん、あの時本当にあなたがきてくれなかったらあたしどうなっていたかわからなかった・・・、それに、それに、ロイド、あなたにもう一度会いたくて会いたくて・・・やっと会えて、あたしとてもうれしかったの！」

あの日以来、また会える日を、もしかしたらもう二度と会えないないかもしれない、でも、もしかしたらとロイドに逢える夢を何度見たことだろう。それを思うと、気持ちがあふれ出して、青い瞳から

流れる涙を止めることが出来なくなってしまった。

「泣くなよ、俺だってフリーユレを助けられて良かった、それに俺もお前にもう一度逢えて本当によかったよ。」

両手で顔を覆い泣きじゃくるフリーユレの頭に手を置くと金色にいろどられた髪を優しくなでた。

「オルガとロツシユだっけ？」

ロイドはまっすぐ2体のドラゴンを見つめて

「悪いのは俺だ、すぐここから立ち去るよ。すまなかつたな。」
手に持った剣をフリーユレの腰の鞘に戻すと、

「じゃあな、フリーユレ」

リュックを片手に持ってフリーユレから離れると、TBまで戻り、ハッチをあけた。

「ロイド！」

振り返ると、涙で真っ赤に晴らした青い目に鼻水でぐちゃぐちゃになったフリーユレの顔があった。

「まったく、せっかくの可愛い顔がそれじゃあ台無しだ、そらよ、」

「あっ」

投げたタオルをキャッチしたのを見送ってロイドはコクピットに乗りこんだ。

「フリーユレ、あんまり無茶して2人に心配かけんなよ、元気でな！」

フリーユレに向かってニカッと笑うとハッチを閉めた。

ガンドレットを装着しサークレットを頭にかぶる。

・・・機動・・・

ブウンと展開したモニターにタオルをぎゅっと握り締めるフリーユレの顔が映った。

「じゃあ、フリーユレを頼むぜ。」

「ふん、貴様にいわれるまでもないわ。」

ロイドは一回うなづくとフリーユレたちに背を向け歩きだす。

ロイドーーーーー!!

もう一度だけ、振り向いてもらいたくて、フリーユレは精一杯の声を
出してロイドの名前を叫ぶ。

「フリーユレ……」

ロイドは振り返らず、ただ挙げてたその手親指をつえに挙げた。

「ロイド……」

去っていくTBを見つめるフリーユレを赤々と燃える夕日が包み込
んだ。

「さあ、フリーユレ様、我々も戻りましょう。」

「ええ。」

泣き腫れた顔を隠すように兜をかぶると、光を身にまとい、フリー
ユレはドラゴンへとその身を変える。

そして3体は飛び立った。

「オルガ、ロツシュ、わたしは……」

「もうなにもいいません」

と一言いつてオルガは口を閉ざす。

「実はフリーユレ様、こんなときで申し訳ないんですが……」

ロツシュがおずおずと切り出す。

「わたしはもう大丈夫。で、どうしたの？」

「はい、実は……」

ロツシュがその先を言おうとすると、オルガがその先をさえぎった。

「その話は族長の前で話そう。フリーユレ様も今しばらくお待ちく
ださい。」

「ただいま戻りました。」

兜を脇に抱えフリーユレは族長の部屋に入る。

いつも荘厳としているのだが中はざわついていた。

「フリユール、お帰りなさい。」

「いったいどうしたんですか？」

「ええ、実はデイノサウルの大群が南に向かっていているという報告がありますね。」

耳を疑うフリユール。デイノサウルはその一生を同じところで過ごすはずなのにいったいなにがあったというのだ。

「ところで、フリユール達の方は何か報告することはありますか？」

「・・・ロイドのことを言わなくてはならないの?・・・」

そう思つてどうしようかと迷つてしていると、後ろに控えていたオルガが口を開いた。

「フリユール様がデイノサウルと接触。そちらは処理いたしました
が・・・ロツシュ、」

この先はお前が話せと、オルガは促した。

「あ、はい、前から監視していた中央惑星政府の発掘部隊が全滅。
そして、アレが目覚めました。」

族長達の間に戦慄が走った。

「とうとうこのときが来てしまいましたか・・・、」

フリユールの母である族長は額に手を当てると頭を振る。

「お母様、アレとはなんあんですか？」

「フリユールにはまだ話していませんから知らないのも当然ですね、あのデイノサウルたちがいる山脈の下にはテラメノムという山のように大きい生物がいるのです。そして私たちは祖祖父の時代から監視してきました・・・。いつかは起きるとおもっていましたが、それがいまとは・・・。おそらく採掘が刺激してしまったようです。」

ロツシュに向き直ると、

「で、その進路は?」

「まっすぐ南下しそのまま運河に到達する模様です。」
運河と聞いてフリユールはビクンとなった。

・・・運河のコロニー『ドウム・スピロー』、ロイド・・・
すると誰かが

「そつちには確か人間どものコロニー『ドウム・スピロー』がある
ほうか。まあ自業自得だな。」

「まったくだ、いい気味だ」

声のしたほうをフリーユレはキッと睨む。しかし声の主は気がつか
ないのか「ざまあみる」だとか

「このまま全部のコロニーを壊してしまえばいい。」と話を続けて
いた。

「フリーユレ様」

そんなフリーユレの態度ををオルガがたしなめる。

「族長、とりあえず南の避難だけで、後は様子見でいいじゃないで
しょうか。よもや人間どもを助ける義理もありますまい。」

族長を囲む一人が言った。

「そうですね。ロツシユはとりあえず引き続きテラメノムの監視を
お願いしますね。」

「はい、かしこまりました」

「では、そういうことですから、フリーユレ、事が落ち着くまでは
南にはいかないように、オルガ、避難のほう指示を頼みましたよ。」

部屋を出ると

「フリーユレ様、くれぐれも単独行動はお慎みください。それと・
・あの人間の青年のことはお忘れになつてください。それがあなた
のためです。」

オルガはそう言い残すと、任務のために去っていった。

フリーユレは部屋に戻ると鎧を脱ぎ捨て、兜を床に投げつける。兜
が転がって止まった

机の上を見るとロイドがくれた携帯食料が載っていた。

真空パックで防腐処置を施されたそれは3ヶ月経った今もそのまま

の形を保ち続けていた。

「ロイド、あたしはどうしたらいいの……。」

今にでも飛び出して行ってロイドの下へ行きたい衝動に駆られる。

でもわたしは、ドラゴンでそしてその族長の娘……勝手なことはできない……でもあたしは……

ぎゅっと胸に四角いロイドの思い出を抱きしめると、これから起こる惨劇で生き残ってと、ただ祈り、そしてその祈りの虚しさに涙するのだった。

目覚める恐怖

「隊長、爆破の用意が整いました！」

作業服を来た男はピシッと敬礼をしながら言った。

「よし、いよいよか……。」

隊長と呼ばれた男は顎に蓄えた髭をなでる。

「私も立ち会おう。」

安全帽をかぶると呼びに来た部下を伴って歩き出す。

カツカツカツ……

後ろに続く部下に話しかけた。

「これでこの3ヶ月間の苦勞が報われればいいんだがな。あのドラゴンもどきを始め、本当に苦難の連続だった。おまけに掘っても掘っても真新しいものは出てこない。まったく割に合わん。」

「ですが、今度こそ当たりだと、分析チームも言っておりますしデータからも十分に期待できるかと……。」

「ふん、やつらのそのいい加減な言葉は聞き飽きたよ。この前、未知のレアメタルがあるとかなんとかいって、化けミミズの巣をぶち抜いて、何十人も作業員が犠牲になったしな。」

今回もまたハズレだったら、外をうろつく猛獣どものえさにしてやるわい。」

「まあでも、数週間前に到着したアレで外敵からの被害は減りましたし、これからすべてがうまくいきますよ。」

と行って空を見上げる。何も無いように見えるそこにはバリアシエルと呼ばれるもので覆われていた。バリアシエルは主にコロニーで使われているもので、電磁場の膜を発生させすっぽり覆うことで万能ではないものの、外部からの脅威を退けることが出来た。

「まったく、政府の連中も対応が遅いんだよ！」

そう愚痴っているうちに現場に着いた。

少し離れた場所ある、ぼつかりと空いた洞窟からは一本の銅線がこ

ちら側に向かって伸びていた。

「隊長、いつでもいけます！」

「よし、カウントダウン20で開始！」

「了解、カウントダウン20で入ります！20、19、18、・・・」

復唱後、爆弾のスイッチを持った係りがカウントダウンを開始した。

「5、4、3、2、1、爆破！」

ドォーン

籠ったような爆発音と共に洞窟から爆風と共に砂煙が飛び出した。

「うまくいったようだな。」

煙が晴れ、洞窟の中の確認をしに入っていた先行隊に、しばらくして無線を入れた。

「どうだ、何か見つかったか？」

「隊長、それがその・・・なんといいたらいいか・・・。」

いいよどむ先行隊に業を煮やし

「はつきり言わないか！もういい、私も今からそっちに行く！」

と部下を引き連れ洞窟の中に入っていく。穴に入り100メートルほど行くと先行隊と合流すた。

どうやらそこで行き止まりらしい。

「一体どうしたというんだ。」

前にいる先行隊を押しつけ前に出ると、安全帽についたヘッドライトをオンにしてその行き止まりを照らした。

「な、なんだこれは・・・」

ヘッドライトの光に映し出され目の中に飛び込んできたものは、又ラツとした赤い壁だった。

近寄って触ると、それは弾力があって生暖かった。

ドクン、ドクン、ドクン

よく見ると脈を打っている。

「生き物なのか？ 鉱石ではないよな、ええい、分析チームのやつら

めまたしくじりおつて！」

驚きと落胆、そして怒りの声を漏らした。

・・・また変なものを掘り当てしまった！・・・
そこにいる全員がそうおもったときだった。

グラグラグラグラ・・・

突然洞窟全体が揺れ始めた。

「地震か?!、全員今すぐ洞窟の外へ出るんだ！」

洞窟の外に出ると、待っていた部下達が駆け寄ってきた。

「隊長、この地震はいつたい何が起こったんですか？」

「私にもわからん、と、とにかく地震が収まるまで避難だ！」

「隊長!大変です!」

部下の一人が手に持ったモニターを覗き込みながら声をあげた。

「今度はどうしたんだ!」

「いま震源地を割り出そうと、衛星からのデータを受信したんですが、ここ半径1Kmの範囲を含む一帯が移動しているんです。」

「な、なんだって?そんなバカなことが・・・」

ドカーン

突然後ろの岩肌が炎に包まれた。

「次から次へと、今度はなんだ?!」

「あ、あ、あ、」

脇にいる部下が空を見上げ、指差しながら口をパクパク開いた。

それにつられて上を見上げると、無数の影が宙を舞っている。

それはドラゴンもどき・・・ディノサウルだった。

「どうしてあいつらがここにいるんだ?バリアシエルは一体どうなってる!」

「どうやら今の地震でバリアシエルが故障たようです、」

「なんだと、ええい、さっさと駐屯しているTB部隊に応戦するよ

うに伝える、あと大至急この事態を惑星中央政府の本部に連絡するんだ！」

そうこうしているうちに、空からディノサウルの大群が降下を始めた。

「わあああああ！」

「たすけてくれええ！」

「こつちにくるなああああ！」

逃げ惑う人々、そしてそれに襲い掛かるディノサウル。

惨劇の宴は始まったばかりだった。

「なんだって！採掘所が壊滅……?!」

ロイドが依頼品のタケキノコを持ってギルドにいくとすでにその話題で持ちきりだった。

「ああ、今さつき惑星中央政府から入った確かな情報だ。何でも襲撃を受けたらしい。」

ファン爺はタケキノコの報酬をロイドに手渡しながら言った。

「襲撃って……ドラゴンか？」

ロイドの頭に一瞬、フリーユレのことがよぎる。

「いや、そこに以前から住み着いていたディノサウルとかいうドラゴンもどきらしい……、その襲撃の直前に起こった地震でバリアシールドが壊れたのが運の尽きだったらしい。」

「ディノサウルが？」

「何だロイド、ディノサウルのことを知っているのか？」

「ああ、実は……」

そういいながら小脇に抱えていたクーラーボックスを差し出した。「これは……？」

「これは俺が倒したディノサウルの肉片だ。たまたま出くわしたんだ。ここら辺では見かけないやつだろ？サンプルとしてもって帰っ

てきたんだ。」

「うむ。」

ファン爺はじつとロイドを見つめ、そして口を開こうとしたときだった。

「た、たいへんだ!」

ギルドの中央にある情報管理担当の職員が叫んだ。

「どうしたんだ?」

ギルド中の全員が注目が集まる。

「み、みんな、聞いてくれ。今惑星中央政府から入った情報なんだが、北東の山脈地帯に巨大生物が出現。その大きさ、推定、高さ800メートル、最大幅2キロ!」

「なんだその馬鹿でかい大きさは!山じゃねえかよ、」

「何かの間違えなんじゃないのか?」

「北東山脈ってつて言えば今日壊滅した鉦山発掘場があったところや・・・!なにか関係があるのか?」

「やんややんや、取り巻きが騒ぎ始めた。」

「みんな、静かにしてくれ、まだ続きがあるんだ。その巨大生物をデータベースと照合したところ、昔の文献からテラメノムと判明。」

今現在、『ドウム・スピーロー』方面に向かって南下中。だが方向を変える可能性もあるため、追って連絡する・・・。」

みんな自分の耳を疑い、一瞬にしてシーンと静まり返った。

そして、

「い、今、なんていった?」

「『ドウム・スピーロー』方面って・・・、こっちに向かってきてるんじゃないかよ!」

「そしたら、あそこのコロニーもやばいじゃないかよ、」

「やべえ、逃げない!」

「おい、逃げるっていったって、どこにだよ!」

ギルドの中はもう収集がつかないくらいに騒がしくなる。

「こいつはえらく大変なことになったな・・・。」

ファン爺は禿げた上げた頭をなでながら深くため息をついたのだった。

守るもの

ズズズズ、ズシン　ズズズズ、ズシン

重々しい地響きと共に地面が揺れる。

バキバキバキバキ・・・

立ち並んだ太い木々が、まるでマッチ棒のようにへし折られ、倒されていく。

ギヤアギヤアギヤア

驚いた鳥やそこに住む生き物たちが逃げようとして次から次へ森から飛び出す。

タッタッタッタッタッタ

その中に、コロピックというピンクの毛に身を包んむイノシシに似た野獣の姿もあった。コロピックは家畜や愛玩用ペットとしても広く飼育され、人間にとってではなじみのある生物だ。しかし、野生のコロピックは繁殖期になると巣作りのために群れを成して大移動をし、それに巻き込まれで甚大な被害をこうむったフロンティアコロニーも少なくはない。今は丁度そのシーズン、どんどん森の中から飛び出してくる。

グガアアアアアア

森を覆おう巨大な影の中から分かれるようにして飛び出す無数の黒

い影が、歓喜の咆哮を上げながら、その群れに襲い掛かる。

ブヒィ、ブヒィ、ピギィ、

次から次へと襲い掛かる鋭い牙や爪から逃げ惑つコロピッグたち。

オオオオオオオン

そして、大きな唸り声が空も大地もまるですべてを飲み込んでいくかのように響き渡った。

そしてそれはゆっくりであるが、南へと移動して行くのであった。

ブロロロロオオオ

カンカンカン

「おーい、これはどこへ運ばばいいんだ？」

「ちよつとそこ危ないよ、どいたどいたあ！」

「おぎゃあ、おぎゃあ」

「うえ〜ん、うえ〜ん、ママー、どこお!？」

「こつちよ、ほら、はぐれないようにしっかり手を握ってなさい！」

平原の運河の中洲にあるフロンティアコロニー『ドウム・スピーロ』は、他のコロニーから避難してきた人や中央惑星政府から派遣されてきた人で溢れ返っていた。

ザ、ザ、ザ、ザ・・・。

到着した惑星中央政府軍の飛空艇から、トライルブレイザー通称T

Bの増援部隊が隊列をなして降りてくる。

あの後すぐにロイドたちにもたらされた情報は、更に過酷を極めるものだった。

「ヒュー、すげえな、あれ、最新型のTBだぜ」

と、そのTB部隊を指差しながらライが口笛を吹く。

「ああ、それもあんなに沢山。それでもこの危機をしのげるかどうかは不安だな。」

と眉をポーンはひそめた。

「ったくよお、テラメノムだっけ？その山みたいな化けモンがこっちに向かっただけでもオオゴトなのによ、しかもそいつが背負ってる山にはデイノサウルとかいうドラゴンもどきの巣があって、そいつらも一緒にやってくるって言うじゃんかよ、こりやどう考えてもお手上げだぜ、」

と首を振りながら両手を高く挙げるライ。

「そっういえば、ロイドはそのデイノサウルとやりあったんだろ？どうだったんだ？」

ポーンはデイノサウルとの戦闘経験があるロイドに尋ねた。

「ああ、あの牙といい、爪といい、あんなのが大群でこのコロニーにやってきたら、ひとたまりもないだろうな……。」

ドラゴンを打ち負かし、そしてそのドラゴンよりも更に獰猛なデイノサウル。

・・・あの時は不意を付いたから倒せたものの、正面から遣り合っ
て倒せるものか？・・・

ロイドが険しい顔をしたときだった。

「おい、その三人、くっちゃべってないで手を動かせや！」

ファン爺がロイドたちに向かって怒鳴った。

「へーい。」

いそいそと三人が向かったのはTBの格納庫だった。

そこに着くとロイドは見覚えのある飛空艇が停まっているのを目に

した。

「これは・・・デア・ブルーク号か？」

すると、デア・ブルーク号から次々と降ろされていく大きな荷物の山のほうから声が掛かった。

「おい、こつちだ」

そつちに行くとは荷物のチェックしている一人の音後がいた。

「手伝ってくれるっていうのはお前達かな？・・・うん？見覚えがある顔だとおもったら、

ロイドじゃないか！」

「あの飛空艇を見てもしかしたらと思っていたが、やっぱりフレッドも来てたんだな！」

久しぶりの再会に握手を交わすロイドとフレッド。

「ロイド、知り合いなのか？」

「ああ、この人はフレッド。この前『フォールキャニオン』でお世話になったんだ。Zui-on社のTB専門技師だよ。フレッド、この2人は俺のハンター仲間のライとボーンだ。」

ロイドはライとボーンそしてフレッドを互いに紹介していく。

挨拶が済むとロイドは山積みになった大きな箱を見上げて言った。

「ところでフレッド、これは何が入ってるんだ？」

「これはじゃな・・・、」

聞いてくれるのを待ってましたとばかりに、そのうちの一つの箱に付いたスイッチを押した。

パシユ！

開いたふたの中には見たことのない機材が入ってた。

「これはなんだ？」

正体がわからない三人にフレッドは自慢げに胸を張って言う。

「こいつはTB専用フライユニットじゃよー！」

「『『フライユニット?!』『』」

と驚きの声を上げる三人。

「まあ、百聞は一見に如かずじゃ、ためにこいつに装着してみるかのう。ほら、こつちを持ってくれ」

四人は近くにあったTBに箱の中身を装着していった。

.....

「こいつはすげえな.....」

フライユニットを装着したTBを見てライが感嘆の声をもらす。

「このウイングを展開して飛ぶんじゃよ、そしてこの背中のパニアと直結したロケットエンジンが長時間の空中戦を可能にしてくれるんじゃ。このロケットエンジンは燃費がいい上に両脚部につけた予備のエネルギーパツでTB自体の稼働時をも大幅に増やしてくれるすぐれものじゃ！もちろん、これはどんな型のTBにも装着できるようにしてあるから、ロイド、お前さんのにも装着できるぞい。」

「でも、こんなもの本当に必要なの？」

ポーンは取り付けたフライユニットの各箇所を一つ一つ確かめながら言った。

「デインノサウルだっけか、あいつらはそれを飛ぶんじゃろ、それにテラメノムじゃったか、高さが800メートルもあるっじゃから、地上から攻撃よりも空中からのほうがいいじゃろて。」

「でも、俺たちは空なんか飛んだことないぞ？」

ロイドは困ったように言った。

「なあに、敵さんがここに着くまで後10日くらいはあるんじゃろ？十分に飛ぶ訓練をする時間はあるわい。」

「そうか、それに出来る出来ないじゃなくて、やらないとだもんな。」

ロイドはぐつとコブシを握り締める。

「そうじゃよ、そのとうりじゃ。あとな、こつち側の箱には対デインノサウル用の武器がはいってるぞい。ロイドが持って帰ってきたサ

ンプルの分析して作ったものじゃ。後で見といてくれ！」
取り扱い注意とかかれた箱をバンバンとたたきながらフレッドは言った。

「そうと決まったら、さっさと始めるぞい！まずはTBにどんどん
フライユニットを装着していくぞ！」

それからロイドたちはTBの調整と飛行訓練に追われ、瞬く間に日は過ぎていった。

そして、とうとう決戦の前夜……。

がやがやがやがや……

ギルドの中は惑星中央政府のTB部隊をはじめ、周りのコロニーから集まった有志のTB乗り、そしてロイドを含む『ドウム・スピーロー』のハンター達でひしめき合っていた。

「皆さんお静かに願います。」

みんなが静まりかえる中、中央惑星政府軍の制服を来た壮年の男性が即席の壇上のうえに上がった。

「諸君、私が明日の作戦指揮執る、惑星中央政府軍第5飛空挺部隊旗艦ブレイズの艦長マグナスだ。」

明日戦う敵は人類史上例を見ない化け物だ！しかし、我々の力を合わせればきつとこの困難を乗り越え、ここ『ドウム・スピーロー』に降りかかるうとする脅威を振り払えると私は信じている！

そして明日という日を生き残り、そして今度は共に勝利の酒を飲もうではないか！」

そういうと、片手に持ったグラスを天井に向かって高々と掲げ

「明日の勝利に、かんぱーい！」

かんぱーい！……！

決戦前日ではあったが、ささやかな宴が始まった。

ロイドは仲間達とひとしきり飲んだ後、夜風に当たろうと、一人ギルドの外に出た。

老人や子供、非戦闘員は皆すでに他のコロニーに避難しており、コロニーの中は静けさに包まれていた。

今夜は満月、ロイドはギルド前の広場の段差に腰を下ろし、月の光に映し出されたモニュメントを眺めた。

このモニュメントはここフロンティアコロニー『ドウム・スピーロー』が完成したときに記念碑としてここに作られたものだ。

「いよいよ明日か……」

正直ロイドは明日の勝利を微塵も信じていなかった。もちろん、父親達が開拓したこのコロニーを守りたい、その気持ちに偽りはない。しかし、ハンターとしてこの星で生き抜いてきたロイドにとっては、どうすることも出来ないことだとわかってしまっていた。

それだけに、ロイドは虚しいこの気持ちに苦しくなる。

たとえ明日生き残れたとしても、このコロニーは消える……。

「親父……」

そうつぶやくロイドの瞳に、月の光で浮き上がったモニュメントに彫られた碑文が映る。

……そういえば、俺がまだ小さな子供だった頃、よく親父はファーン爺達と酔っ払っては大声でこの碑文を囲んでは読み上げたいたっけ。そして迎えに来た俺の頭をぐりぐりしながら、

「俺達はよ、ここに書いてある事をいつも胸にな、そりゃあ色々あったが何とか開拓して『ドウム・スピーロー』を作る事ができた。

だからこうして読み上げるとよ、俺達は希望を胸に明日もどんな困難にも立ち向かって頑張ろうって力がわいてくるんだよ！」

首を傾げる俺に親父は、俺にもいつかわかる日が来るはずって言ったけど……。

「まだわかんないよ、親父……希望も何もないんだぜ……」

「でも、」

とロイドは立ち上がる。

「最後まで親父の作ったこのコロニーを守って戦うぜ！」

と腰のホルダーから抜き放ったガンスラッシュを月に向かって掲げるのだった。

破壊という恐怖の中で

翌朝………

ロイドはいつものように目覚めた。

ベッドの横に MARIA たちが用意してくれた服に腕を通す。

そして、腰にガンスラッシュの入ったホルダーをベルトにつけた。

「よし……！」

台所に行くとテーブルの上の朝ご飯が美味しそうに湯気を上げていた。

「おはよう、おお、今朝もうまそうだな！」

「あら、ロイド、おはようございます。」

「ロイド、グッドモーニング！」

「ロイド、お早う。」

ロイドに気がついた MARIA、レイ、ソフィアが挨拶をする。

「いよいよですね……。」

MARIA はマグカップにコーヒーを入れながらロイドに話しかけた。

「ああ、」

朝ごはんを食べながらうなずく。

「なんだロイド、その気のない返事は！もしかしてビビってるのか?!」

と、オレンジのアイライトを点滅させながらレイ。

「そ、そんなことはない。」

「ロイドなら、やれる!」

と頭の耳をピコピコさせてソフィアがロイドを応援する。

「お、おう、そうだな」

そして、ロイドは何かを振り払うかのように黙々と朝ごはんを口に運んだ。

朝食を済まし、支度を整えると

「そろそろ、行くか。」

頭にゴーグルを付けロイドは立ち上がり玄関へと向かう。そして立ち止まった。

「俺は、……本当は怖いんだ。」

「ロイド……」

ロイドはマリアたちを振り返ると続けた。

「ずっとハンターをやってきて、いまさらかと思うかもしれない。

でも、この家が、俺の戻ってくる場所がなくなってしまおうと思うとその恐怖で胸が張り裂けそうなんだ。」

苦しそうに胸元を握り締めるロイドを見て、マリアは思い出したように

「忘れる所でしたわ、レイ、ソフィア、アレを渡しましょうか！」と胸部の収納を開き中から何かを取り出した。

「うん？これは……?!」

出てきたのは、真ん中にフリーユレからもらった四角柱の水晶をはさんで、両脇に2枚の鳥の羽のチャームが付いたネックレスだった。

「この日のために、みんなで作ったんですよ。」

ブルーのアイランプを点滅させてマリアがロイドの手にそっと握らせた。

羽根の裏側を見ると、一枚にはマリア、レイ、ソフィア、もう一枚にはロイドの名前が彫ってあった。

「力作なんだぜ、大事にしるよな！」

自慢げにオレンジのアイライトを点滅させ胸を張ってレイが言う。

「しかし、お前達の名前が入ってるのわかるんだが、何で俺の名前まで？」

するとソフィアがピンクのアイランプでじっとロイドを見つめ

「私達とロイド、いつも一緒！」

その言葉に、ロイドは、これから先のわからない戦いに立ち向かうロイドへと、このネックレスに込められたマリアたちの想いに気が付いた。

「マリア、レイ、ソフィア……」

ぎゅっとロイドはマリアたちを抱きしめる。

「ありがとう。俺は、俺は必ず守ってみせる、お前達をそして、この親父の作ったコロニーを！」

そして、照れ臭そうに離れると、ロイドはネックレスを首にかけた。

「じゃあ、行こう。マリアたちはギルドに避難するんだ。ギルドのは話を通してある。」

すると、

「いいえ、私たちはここに残りますわ。」

「でも、ここにいるよりはギルドの地下シェルターにいたほうがまだ安全だ。」

「あたしたちはここでロイドの帰りを待ってるよ。それにいざとなったら、どこにいても同じだろ？」

「ロイドの無事、家で待つ。」

ロイドは、はぁーとため息をついた。

「お前たちは一回決めると、テコでも動かないもんな。わかったよ。でも本当に危なくなったら逃げるんだぞ！」

「わかりましたわ！そのかわり、ご馳走を作って待ってますね！」

「ビシッ行ってバシッつと倒して来い！」

「ロイド、ガンバ！」

「それじゃあ、みんな、行ってくる!!」

ロイドはマリア達に見送られ、家を後にしたのだった。

ズズズウン、ズズズウン

重々しい地響きと共に、だだっ広い平原にのっそりと山のような影が姿を現した。

「あれが、テラメノムか・・・」

ロイドたちは、フロンティアコロニー『ドウム・スピーロー』から北東に20キロ離れた場所にある窪地で待機していた。その上には大小さまざまな大きさの飛空艇が何十艘も飛んでいる。

ロイドはトライルブレイザー通称TBのモノアイの望遠カメラでコクピットの中でモニター越しに初めてその姿を見た。山を背負って歩くその姿はまるで亀のようで、また、太く長い足をゆっくり動かしながら歩く姿は、昔読んだ『地球の動物達』に出てくる象という生き物にも似ていた。

オオオオオン

時折、突き出した頭を左右に振り、そして空に向かって咆哮をあげた。

そろそろ作戦開始の時間だ・・・。

ロイドがモニターの端に表示された時計で時間を確認していると、通信が入った。

「諸君、後5分で戦闘を開始する。作戦は打ち合わせどおり、我々飛空艇部隊がああテラメノムに主砲で攻撃を仕掛ける。TB部隊はテラメノムと距離をとりつつ、飛来してくるであろうディノサウルの処理にあたってくれ。予測外のことが起きたら場合は、落ち着いて指示に従うように。以上。健闘を祈る。」

今回の作戦の指揮を執る飛空艇ブレイズの艦長マグナスからの通信が終わると

「いよいよ、始まるんだな・・・。」

「うっしやあ！頑張ろうぜ！」

ハンター仲間のライとポーンが通信を入れてきた。緊張しているのか、声がかすかに震えている。

「ああ、全力で俺達のコロニーを守る！」

ロイドはガントレットをはめたの手握り締め、その感触を確かめ

た。

「艦長、作戦開始、1分前です！」

オペレーターの声が艦橋に響き渡る。

「まずはあの背中の山を破壊して丸裸にしてやろう！主砲の準備は大丈夫か？」

「いつでもいけます。艦長！」

「作戦開始30秒前、カウントダウンに入ります。30、29・・・」

「カウント0と同時に主砲発射、用意！」

「了解、カウント0と同時に主砲発射、用意！」

主砲担当の士官が復唱する。

5、4、3、2、1、・・・0

「作戦開始！撃てえー！！！」

空を切り裂いて、飛空艇から一斉にはなたれたレーザーが束になってテラメノムの背中に突き刺さった。

ドゴオオオオオ

爆発と共に岩山の一部分が吹っ飛んだ。

フオオオオオオン

突然の攻撃に驚いたのか、テラメノムは首を天高くそらし咆哮する。すると、背中の爆煙の中から無数の黒い影が次々に飛び出してきた。

「TB部隊、デイノサウルに攻撃開始、飛空艇部隊は援護射撃および、主砲の再装填を急げ！」

次々に地上で待機していたTBがフライユニットを展開して飛んでいく。

「俺達も行こう！」

「おうよ、ちゃっっちゃと終わらせちまおうぜ！」

「みんな無事だな！」

ロイドたちもそれぞれの背中のロケットエンジンを噴かせ空へと高く舞い上がる。

「なんて、大ききなんだ！」

上空からテラメノムを見てロイドははじめて目の当たりにするその大きさに、ごくりとつばを飲み込む。爆煙がはれて見えた岩山は、あれだけのレーザーが撃ち込まれたのにも関わらず、そのほとんどが残っていた。

・・・本当に倒せるんだろうか・・・

しかしロイドはすぐにそんな考えを振り払うかのように頭を振って気持ちを切り替える。

「今は、とりあえずディノサウルの相手だ！」

すでに衝突を始めたTB部隊とディノサウルの中にロイドは突っ込んでいく。

・・・セーフティロック解除！・・・

頭のサークレットに思念を送り、目の前に飛び出してきたディノサウルにライフルの銃口を向けた。

ズガン、ズガン、ズガン！

腹、首、翼に穴を開けて落ちてくディノサウル。

「思った以上の威力だ！」

フレッドが用意してくれた、対ディノサウル弾の威力にロイドは心強くなる。

「よし、どんどん来い！」

ロイドは銃口をひらめかせ、次々にディノサウルをしとめていく。ゴオオオオオ！

背後から放たれた火球のプレスを、空中でひらりとかわすとその頭を打ち抜く。

カシャン

空になったマガジンを交換して次の標的を探したときだった。

「これより主砲を発射します。射線上のTBは即座にその場から離

脱してください。」

ロイドたちはすぐにその場から飛び去ると、レーザーの束が逃げ遅れたデイノサウルたちを巻き込んでテラメノムに突き刺さる。

「どうよ、ロイドそっちは、」

空中で待機していると隣に来たライから連絡が入った。

「ああ、こっちは順調だ！そっちは？」

「こっちもばつちりだぜ、こいつは案外すんなりと決着がついちまいそつだな！」

そうライが余裕の言葉を発したときだった。

それまでただひたすら歩いていたテラメノムが、首をもたげ、そして思いつきり口を開く。

グオフォオオオオオオン

そして、今までにない雄たけびと共に、口から衝撃が放たれた。

「うわああああ」

突然の出来事でよけ切れなかったTBがその渦に巻き込まれてちぎれ爆発を起こす。

放たれた衝撃の渦がロイドたちにも迫る。

「やばい！」

ロイドはフルスロットルでロケットエンジンをふかすと、何とかぎりぎりですることが出来た。

「危なかった……。」

額にかいた汗をぬぐってロイドが胸をなでおろした時だった。

「やばい、このままだと『ドウム・スピーロー』に直撃するぞ！」

ボーンの声に後ろを振り返ったロイドの目に映ったのは、まさに激突する瞬間だった。

ドドオン！

外周を囲んだ壁が吹っ飛び、地面をえぐり何もかもをなぎ倒していく。

コロニーの中心への直撃はまのがれたものの、その3分の1が吹っ飛んでしまった。

「あ、あそこは……！」

ロイドは急いでアイカメラノ望遠レンズで被害のあった場所を見る。土煙が収まりロイドの目に映ったのはえぐられた大地だった。

「お、俺の家が……」

そして同時にロイドの頭にマリアたちが浮かび上がった。

「マリアア、レイイ、ソフィアア！」

「お、おい、どこへ行くんだロイド」

ロイドはライの呼び止める声を振り切って自分の家があったであろう場所に飛んでいった。

「マリア、レイ、ソフィア、どこだ！」

地面に着地すると、ロイドはわれを忘れてモノアイのカメラを縦横無尽にうごかし積みあがった瓦礫を押しつけて探す。その姿はどこにも見当たらない。と、その中からジャケットが目飛び込んできた。

「これは俺のジャケットだ。」

ロイドは瓦礫に挟まったジャケットを引っ張る。すると、その反対側の端を何かが握っているのが見えた。

それはマリアたちの手だった。

「今助けるからな！」

ロイドはTBから飛び降りると、ジャケットを引っ張りながら瓦礫をどかそうとした。次の瞬間、にジャケットがするりと抵抗もなく持ち上がった。そしてその端にはマリアたちの腕だけがぶらぶらと揺れていた。

「?!」

ロイドは声にならない声をあげてその腕をみた。
数分前、

「ふんふんふん〜私はアンドロイド〜あなたに〜、して上げれることとは〜、かぎられるけどお〜」

この思いがいつかあなたに届くと信じてえ〜、たとえ〜届かなくても〜一緒にいられるだけで幸せだから……ふんふんふんふん〜」

「マリアは決まって洗濯するときはこの「アンドロイドの切ない恋」という歌を歌っていた覚えがある。」

「マリア姉、そこ歌詞が違うよ！」

「音、外れてる。」

レイとソフィアが指摘するもなんのその、3人はいつもの時間をすごしていたはずだ。

そんなマリアたちにとっては一瞬の出来事だったに違いない。きっと何もわからなかったはずだ。

でも、その最後の一瞬までマリアたちはロイドの帰りを信じて、明日着るであろうジャケットを洗濯していただいたのだ。

「だから、避難しろって言ったのに……」

冷たくひび割れた腕を握り締めてロイドはつぶやいた。

「つーと涙が頬を伝う。」

……

その腕をジャケットに包むとロイドは無言でTBに乗り込んだ。

「マリア、レイ、ソフィア……。」

TBを飛ばしながら、いままでのマリアたちと過ごした日々を思い出す。

「俺はマリアたちを守るって約束したのに……」
ぎゅっと、ガントレットの中の手を握り締める。

ピピッ、

モニターにテラメノムが映し出される。それを目にしたロイドは心の底から何か突き破って出てくるのを抑えることが出来なかった。

「よくも、よくも、」

そして沸々と湧き上がる怒りにまかせて、

ドオン！

ロケットエンジンの出力をMAXにして一気に飛ぶ。

「おおおおおお」

そして雄たけびを上げながら、テラメノム目指し疾走する。しかし、そんなロイドをディノサウルの群れが行く手をさえぎった。

「どけえ、そこをどけえ、」

ロイドはライフルを撃ちながらその群れに突っ込んでいく。

「ロイド、深入りしすぎだ、戻るんだ！」

ポーンは飛び出していくロイドに注意を呼びかけるが、ロイドには聞こえていなかった。

「くそう、くそう、マリアたちを、返しやがれえええええ！」

ロイドは怒りのままに、ひたすら撃って撃ってうちまった。

今までもおおくの死を目にしてきた。嘲笑って挨拶を交わした人が、夕方に物言わぬ屍になっていることなんてこの未開の辺境の地では珍しいことではない。

親しかった仲間も、もう何人も失ってきた。そしていつ自分がそうなるかもわからない。そう、いつ別れが来てもおかしくない……
・ロイドにはわかりきっていたことだった。

しかし、20年間ずっと一緒だった、唯一の家族を失った事実と、そしてその思い出がロイドの心を締めあげ、切り刻んでいった。
ガキンガキン
ライフルの弾が切れる。

「くっ、」

急いでマガジンを交換しようとする。それを見たディノサウルの一匹がこれ幸いと火球をロイドに向かって吐き出した。

ドオオン

とっさのことで反応が間に合わず、左肩のシールドで防御する。

しかし、衝撃で体制が崩れしまっ。すかさず追い討ちをかけるようにディノサウルは尾を振り上げた。

バシィイーン!!!!

よけることも出来ず鋭い尾の一撃を受けるロイド。

「うわああああ」

ビービービー

急降下を告げるアラートがコクピットに鳴り響く。

「く、く、く、」

ガントレットをはめた腕を動かしてなんとか立て直そうとするが、きりきりと回転しながら落下する。

「ロイドオー！」

ライの叫び声もむなしく、ロイドはそのまま墜落して行ったのだった。

「族長、テラメノムと人間が戦闘を始めました。」

ロツシユは族長の部屋に入ると、ひざまずいて報告した。

「そうですか……。」

ドラゴンの族長はその青い目を閉じながら答えた。

「おまちください！」

制止の声を振り切って誰かが部屋に入ってきた。

「お母様！」

目の前には兜を脇に抱え、鎧に身をまとったフリーユレが立っていた。

「フリーユレ、その格好何ですか、あなたには今日一日の謹慎を言い渡しているはずですよ。」

「お母様、わたし行きます！」

「どこへ何をしに行くというのですか？」

「もちろん、テラメノムと戦いに！」

「行ってどうなるというのです。それに私達ドラゴンにとって、もうテラメノムの脅威は去ったんですよ。」

「でも、私は……。」

フリーユレの言葉を手で制し、

「あの青年を助けに行くのですね。いいでしょう、この際はつきり言います。あなたはドラゴン、人間の彼とは決して幸せにはなれない。万が一彼があなたの想いを受け入れて結ばれたとして、でも生まれてくる子供はどうするのですか？どちらからも受け入れられない

く、不幸を背負うことは目に見えています。確かに昔は私達ドラゴンと人間の結婚はありましたし、生まれてきた子供は私達ドラゴンと人間との友好の象徴でもありました。しかし、いまは状況が違うのです。それにあなたはこの族長である私の娘。いずれは私の後を継いでドラゴンの長として皆を率いていかなくはならないのですよ。」

そしてじつとその青い瞳に映るフリーユレを見つめ

「それでもあなたは行くというのですか？」
と問いかける。

フリーユレはそんな母の目を同じ青い目でじつと見つめかえし、
「彼は私のことを幾度となく助けてくれました。そしてわたしは、そんな彼をわたしは想い焦がれるようになっていました。たとえ、この想いが伝わらなくても、後悔だけはしたくないんです！たしかに、お母様がおっしゃたことは間違っではない。わかっています。・・・でも、それでも、わたしは、いえ、あたしはこの想いととも
に彼の元へ行きます！」

兜をかぶると、フリーユレは光に身をつつんだ。

「フリーユレ！」

ドラゴンに変身したフリーユレは母の制止を振り切るようにして、そのまま屋根を突き破り、飛び出していく。

「まるで、昔の族長を思い出すのう、あの頑固っぷりはそっくりですな。」

フリーユレが飛び去った後、族長を囲んで座っている一人が言った。

「ふおおおお、屋根を壊して行くところまで同じとはな・・・」
もう一人アゴに生えた髭を揺らしながら笑う。

「さて、どうしますかな？族長。」

丁度そこへフリーユレを探しに来たオルガが入ってきた。

「失礼します。フリーユレ様はこちらにおいでですか？うお、これは
いったい?!」

ぼっかり開いた屋根をみて驚くオルガに

「いま、飛んでいったわ。」

額に手を当てて族長は、はぁー、とため息をついた。

「な、なんと、それはいけませんな、今からすぐに追いかけて連れ戻してきます。」

そういつて飛び出していこうとするオルガを呼び止めた。

「オルガ、お待ちなさい。それよりもあなたに折り入ってお願いしたいことがあるのです。」

「はっ、族長のお願いとあらば・・・！」

かしこまるオルガに

「これから戦の準備をして、戦士団を率い『ドウム・スピーロー』に向かつてください。おそらくそこにフリーユレも向かっているでしょうから。」

「でも、それでは、人間に加勢することに・・・。」

「ええ、おそらく人間達は苦戦してるでしょう。ですから、ここでディノサウルを蹴散らし、彼らにわたし達の本当の強さを見せ付けるという意味でも絶好のチャンスになるはずですよ。」

「わかりました。そうとあればさっそく準備に取り掛かります！」

さっと、身を翻してオルガは部屋を出て行った。

「フリーユレ、無事で帰ってきてくるんですよ・・・。」

そっと手を組んで娘の無事を祈るのだった。

援軍

「うわああああ」

バキバキバキと木々の枝を折りながらロイドの乗ったTBは森の中に突っ込んだ。

激しい揺れと衝撃がコクピットを襲い・・・そしてズ、ズン・・・。

最後に何かにぶつかるようにして止まった。

「かはっ、」

最後の衝撃で肺の中の空気が搾り出される。

「う、くっ、うすうー、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

空気を求め、なんとか息を吸い込む。激しく頭が揺さぶられたためか、意識が朦朧とする。

モニターをかすんだ目で見ると、高度計が0を表示しているのを確認することが出来た。

あの状況に関わらず、どうやら命拾いしたらしい。

まだ頭がはつきりしないのか、ビービーと鳴る機体の損傷を知らせるアラートが遠くに聞こえる。

モニターを見ると駆動部のいたるところが赤くなっていて、TBを動かすことは見るからに絶望的だった。

「なんでまた、生き残っちまったんだ。」

頭をシートに預け、ぎゅっと目を閉じる。

かちやり・・・

ネックレスについた鳥の羽根のチャームと四角柱の水晶がこすれて音を立てた。

ロイドはそれをぎゅっと右手で握りめる。

「俺は何もかも失っちまった・・・お前達も・・・帰る家も・・・」

閉じたまぶたからあふれた涙が頬を伝わり握り締めたこぶしからは

み出た水晶に一滴、二滴と落ちる。

「おまけに、カタキすらも討ってやれないなんて……」

やるせない気持ちに、左手で作ったこぶしを振り上げ、自分の太ももにたたきつけた。

「親父。俺はあんたがのこしたものの何一つ守れなかった……守りたかったのに、何も出来なかった。」

まだコロニーのみんなが戦っているっていうのに、このザマだ……俺はどうしたらいいんだ……。」

どうすることも出来ず、ロイドの心の中は悔しさと悲しみと虚しさであふれ、嗚咽を漏らして泣く。

「ちくしょう、ちくしょう」

……

「あらあら、ロイド泣いてますの？」

「うわあ、何、号泣してるんだよ！」

「泣き虫！」

きつと今の俺を見たら、マリアたちはこんな風に言うのだろうか……。

「泣いて悪いか、俺はお前達を守れなかったんだからな！」

虚空に向かって、ロイドは叫ぶ。

「守れなかった？何言ってるんだよ、あたし達は無事だぞ！」

帰ってくるはずのない返事にロイドは驚いて目を開いた。

「あはは、ロイドの目、真っ赤！」

「ズボンのポケットにハンカチを入れておいたはずですから、ちゃんと拭いててくださいいな。」

「ロイド、かつこ悪い」

「こ、この声は……マリア、レイ、それにソフィアなのか？今どこにいるんだ？」

するとコクピット内のスピーカーから、

「どこといわれましても……ロイドのジャケットをお洗濯していて、突然、ものすごい風が吹いて、

気がついたらロイドの泣き声が聞こえて、そういえばあたし達、どうしてロイドと一緒にのかしら？」

と、いつもどおりのおっとりとしたマリアの声が聞こえた。

「ネックレス……」

ソフィアの声にロイドは握り締めた手を開いてネックレスを見た。

すると、真ん中の水晶がぼんやりとブルー、オレンジ、ピンクと点滅していた。

「まーまさか、お前達この中に？」

「うーん、よくわかんないんだけどね。そうっばいよね、」

レイ達も良くわかっていないらしい。

「多分、お守り効いた。」

とソフィアがうれしそうに言った。

ロイドにも今起こっている出来事は信じられないものだった。

ドゴーン

突然、空から爆発の音が響いてきた。

「く、」

おもわず手を挙げると、動くはずのないTBがガクンと動いた。

「これは……」

水晶を見ると、あのときのように強い光が灯っていた。

「ロイド、まだやれますか？」

とマリアが静かに聞いてきた。

「ああ、まだ良く理解できないんだけどな、お前達とまた会えて力が湧いてきたよ。」

すると、

「わかりました。わたし達も微力ながら一緒に戦いますわ。私は敵の動きと情報を、レイはロイドの操縦の手助けを、ソフィアはTBのシステム管理を！さあ、行きますわよ！」

するとメインモニターに『SYSTEM NORN』と表示された。

「各駆動系、フライユニットロケットエンジン、オールグリーン」とソフィアの声。

「ロイドのバイタル確認・・・正常。モーションシステムおよびブレインシステムとの同調も良好」と
と、レイ。

「うーんと、敵、上空に多数確認できますわ!」
相変わらずのマイペースでマリア。

「『SYSTEM NORN』?! マリア、お前達は一体・・・」
するとマリアはロイドに言った。
「女に秘密はつきものですわ!」

ロイドが上空に上がるとライから通信が入った。

「ロイド、無事だったのか?!」

「ああ、なんとかな」

「ったくよお、マジで悪運の強いやつだぜ。」

「ところで、ライ、戦況は?」

「一進一退って感じだな、デイノサウルの野郎、数が多すぎるぜ」

「わかった、俺もそっちに合流する。」

「あ、ロイド、弾の補給忘れんなよ、ボーンも今行ってるからよ。」

「わかった、ありがとう」

通信を終えるとロイドは

「ソフィア、ライフルの弾の残量は?」

「マガジンが5つ」

「そうか、まだいけるな、よし、巻き返すぞ!」

ロイドはデイノサウルの群れにライフルを構え突っ込む。

「右から火球3つ来ますわ!」

マリアが警告する。

「あらよつと」

余裕を持って避けることが出来た。

「サンキュー、マリア」

「どういたしまして、次、左から4匹来ますわ。」

ダン、ダン、ダン、ダン

打ち抜かれたディノサウルが落ちていく。

「いい感じだ。」

今まで一人で戦ってきたときとは違う、知らないうちに口元に笑みが浮かんだ。

「ロイド、前後から来ますわ!」

「わかった」

ロイドは頭のサークレットでこれからやろうとするイメージをTBに伝える。

「レイ、どうだいけるか?」

「もちろん!」

まずは前から突っ込んできたディノサウルに向けてライフルを撃つ。頭を打ち抜いたのを確認して、落ちかけるその体を踏み台にして体をひねった。

「レイ、まかした!」

ザシユ!

姿勢制御をレイ任せ、後ろから迫るディノサウルのを、勢いに乗せて抜き放っただんびらの剣バスターで断ち切る。

「つぎはどいつだ!」

すると、

「ロイド、あれを見てくれ!」

ボーンの通信に、ロイドはテラメノムの背中から飛び立つ大きな影を見た。

「なんだ、あれもディノサウルなのか?」

姿はディノサウルだがその大きさは通常の3倍はあった。

そして、驚くスピードで飛翔し、TBを跳ね飛ばしていく。

ドオン、ドオン、ドオン

巨大な火球を口から打ち出し、飛空艇に迫る。

回避し損ねた飛空艇に火球が当たり、煙を上げて墜落していく。更にその墜落していく飛空艇に尾の一撃を加え、空中ではらばらにしまった。

「なんて強さなんだ・・・」

啞然とした声をライがあげる。

「各TBおよび飛空艇に告ぐ。我々はあの巨大なディノサウルをメガサウルと命名。あのメガサウルの対処を最優先にしてくれ！」
指揮官のマグナスからの通信が入った。

応戦も虚しく、次々に飛空艇がメガサウルの餌食になっていく。周りのTBが応戦するも、周りのディノサウルがそれを邪魔をしている。

「ライ、ボーン、俺たちも行くぞ！」

ロケットエンジンを噴かせ、一気にメガサウルに向かう。

ダン、ダン、ダン

ライフルを撃つが、その速さと周りにいるディノサウルに阻まれ、弾が命中しない。

「ロイド、右から5、左から4、ですわ、」

ライフルで必死に応戦するも、全部は捌ききれない。

「くそ、多すぎる。」

吐き出してくる火球を左肩のシールドでなんとかやり過ごす。

「ロイド、後ろ！」

しかし、ガードした直後でうまく反応できない。

「レイ！」

レイは何とか制御して振り返るが

「だめ、間に合わない！」

次の行動を起こすには時間がなさすぎた。

・・・やられる・・・

と、目の前に迫ったディノサウルが突然炎に包まれた。

ギヤアウウウ

そのまま落ちていくディノサウルの上をさっと白い影が横切った。

ドン、ドン、ドン

周りにいたデイノサウルが次々に炎に包まれ落ちていく。
グルルル

モニターに白い鱗に覆われたドラゴンが映し出された。

「フ、フリーユレなのか?!」

外部スピカーで問いかけるロイドに、こくんとうなづく。

そしてここは任せるとばかりに、次々にデイノサウルに火球を吐いていく。

「ロイド、ドラゴンが乱入してきたぞ!」

ボーンの声に

「ああ、でもどうやら狙いは俺達じゃないらしいな、どうする? ロイド!」

「デイノサウルの注意が向こうに向いているうちに、メガサウルをやるぞ!」

ライとボーンを促して、メガサウルに攻撃を仕掛ける。

ダン、ダン、ダン

ロイド、ライ、ボーンの三方向からメガサウルに向かってライフルを撃つ。

「くそ、あんなにでかいくせに、早すぎて当たらねえ!」

ライの焦りの声が聞こえる。

「くそ、どうすれば……」

「翼を何とかできれば……。」

ボーンの声にロイドは。

「ライ、ボーン、俺の前でメガサウルを挟み撃ちしてくれるか?」

「いいけどよ、何か策があるのか?」

「ああ、俺を信じてくれ!」

「わかった、ロイドお前に任せる!」

そして、ロイドはイメージを頭のサークレット送る。

「レイ、できるか?」

「出来る、出来ないじゃないでしょ、ロイド、やるわよ!」

ロイドはガンドレットのなかの手を握り締め、そのときがくるのを待った。

「ロイド!」

ライとボーンの声と共に左右に挟み撃ちされたメガサウルが躍り出た。

「レイ、頼む!」

T Bの手から、更に上に逃げようとするメガサウルの顔にタイミングよく手榴弾が投げつけられ、炸裂した。
ギヤウォオン

突然の爆発に体制を崩すメガサウル。

「いまだ、くらえええ」

すでに肉迫してたロイドはバスターで、背中の翼を切り裂いた。
グギヤウォオオオオ

うめき声を上げながら、そのままメガサウルは墜落し地面に激突した。

「やったか?」

しかし、その巨体ゆえか、結構な高さか落ちたのにもかかわらず、ぐぐぐと巻き上がった砂煙の中から
体を起こす。

「今のうち畳み掛けるぞ!」

トドメを刺そうと地上のメガサウルに向かおうとしたときだった。
ザ、ザザー

まるで盾になるかのようにディノサウルの大群がメガサウルを包む。

「くそ、やばい」

バサ、バサ、バサ

どうやら翼の傷も浅かったようだ。再び飛び上がろうとする。

「だめだ、間にあわねえ!」

立ちふさがるディノサウルの多さにライがたたらを踏む。

すると、上空から無数の火球がメガサウルたちに降り注いだ。

次々に炎に包まれていくディノサウル。

メガサウルも翼を焼かれ、地面に再び落ちる。

容赦なく降り注ぐ火の雨に、とうとうその体を炎包まれメガサウルは倒れこんだ。

「な、なんだあのドラゴンの大群は・・・」

ボーンの驚く声が聞こえて、上空を見るとドラゴンの大群が翼をはためかせていた。

「ドラゴンが一体こちらに來ますわ。」

マリアが言ったとおり、先頭の緑色のドラゴンがロイドの側ににやつてきた。

「オルガだっけ、助かったよ。」

ロイドがお礼を言うと、

「人間、ロイドとかいったか、別に我々はお前達の加勢に來たわけじゃない。フリーユレ様の加勢にやつてきただけだ。くれぐれも勘違いするなよ」

「ああ、わかつてるさ。」

「あくまでもフリーユレ様の護衛として、ついでに、戦ってやろう。くれぐれもデイノサウルなんかと間違えて攻撃するなよ、そう、お前達の指揮官にも伝える！」

「ああ、助かる！」

ロイドはすぐにマグナスに通信を入れた。

「いまいち事情は飲み込めないが、味方は多いことには変わらない。協力感謝すると伝えてくれ。」

そして

「全TBと飛空艇につぐ、今現れたドラゴンたちは味方だ。みんな思う所はあるかも知れないが、状況が状況だ、共同戦線を張る！各自、間違っても攻撃するなよ！敵に回れたらそれこそ終わりだからな。」

と全体通信がマグナスから入った。

「協力感謝するだつてさ」

それを聞いたオルガは

「さあ、お前達、ディノサウルどもを蹴散らして我々の真の強さ、人間どもに見せつけようぞ！」

グオオオオオオオオ！

ドラゴンの大群が空を揺るがすように一斉に咆哮を上げる。

「行くぞ！」

まだまだ沸くように出てくるディノサウルに向かってロイドたちは突っ込んでいった。

受け継いだ想い

戦闘が始まってもう十数時間の時が流れ、日はすっかり落ち、東の空には月が出てきていた。

ドラゴンの援護にも関わらず、戦況は相変わらずの一進一退で、デインノサウルの数も一向に減ることなく、次々とロイドたちに襲い掛かった。そしてその合間を縫うように、前進を続けながらもテラメノムも衝撃を口から放ってくる。

「くそ、『ドウム・スピロー』まで後がない・・・」
数キロ後ろに、運河の中洲にあるコロニーが見えてきた。

「ロイド、あの白いドラゴンが大変ですわ!」

複数のデインノサウルに囲まれて逃げようと爪を振るうフリーユレがモニターに移った。

しかし、空振りに終わったその背中に尻尾を喰らう。そのままフリーユレは力なく落下を始めた。

「フリーユレ!」

フルスロットでロケットエンジンを噴かし、ロイドは地面に激突する前に

何とかフリーユレを掴む。

「大丈夫か!」

抱きかかえたドラゴンの体が光に包まれて鎧に身をつつんだフリーユレが現れた。

ロイドは急いでコクピットのハッチを空けてフリーユレをTBの中に収容する。

兜を外し、シートの後ろのほおると、ぐったりとしたフリーユレに声をかけた。

「おい、フリーユレ、フリーユレ、しっかりしろ!」

「う、うん」

目を開けたフリーユレを見て安堵の息をロイドはもらした。

「フリーユレ、どこか痛むところはないか？」

「う、ん？あれ、あたしは……ここはどこ？」

「俺のTBの中だ。」

膝の上に抱えたフリーユレがロイドの顔を見上げた。

「ロ、ロイド？」

「ああ、無事でよかった。」

するとその青い目から急に涙があふれたかとおもつと、

「ロイド、ロイド、会いたかった！」

といいながらロイドの首に手を回してぎゅっとフリーユレが抱きついてきた。

「え、あ、フ、フリーユレ?!」

突然のことに慌てふためくロイド。

「あらあら、まあまあ、ロイドの彼女さんかしら？」

「あゝあ、ロイドのくせに見せ付けてくれるじゃんかよ!」

「ロイド、隅におけない」

マリアたちの声にはつとまってフリーユレは身を離れた。

うつむくその金色の髪からのぞく頬が朱色に染まっているのを見て

ロイドはドキドキしてしまう。

「あゝつと、ロイド、心拍数があがってるぞお」

「ロイド、エッチー!」

レイとソフィアがロイドをからかう。

「レイ、ソフィア、そこまででやめてあげなさいな。ところで、ロイド、そのドラゴンのお嬢さんを私達に紹介してくださいませんか?」

「あ、ああ、この人はフリーユレだ。この水晶を俺にくれたんだ。」
そうフリーユレを紹介ロイドに

「ロイド、今話してる方たちってもしかしてロイドの家族?どこにいらっしやるの?」

「えゝつと、どう説明したらいいんだ?」

とりあえずロイドはフリーユレにありのままを説明した。

すると

「きつと、それはマリアさんたちの中にあつたドラゴニウムとロイドに渡したこのドラゴニウムの結晶が
そのマリアさんたちの想いに共鳴したからだと思つわ。」

とフリーユレはロイドの胸で光る水晶のように透き通つたドラゴニウムに視線を注ぎながら言った。

「これ、ドラゴニウムの結晶だったのか、それにしてもそんなことが起きるなんて・・・」

そう驚いたロイドに通信が入つた。

「これより、全飛空挺の最大出力をもつてテラメノムに一斉射撃を行う。TB部隊は我々よりも後方に一時避難するように！」

それと共に飛空挺からサイレンが聞こえてきた。おそらくドラゴンたちに対してだろう。

それを聞いたドラゴンたちはさあつと飛空挺の前をあけた。

「俺たちもいつたんだがるぞ」

メガサウルの攻撃で大分飛空挺は減っていたが、それでも20艘近くまだ残っていた。

「エネルギー充填率100%！」

「艦長、他の飛空挺も準備完了との事です！」

「よし、全艦、一斉照射、撃てえ！」

バシューー！

何条もの光が空を切り裂き、テラメノスの頭、足、背中に突き刺さりそして爆発を起こした。

フオオオオオオオオオオ

苦しうに体を揺さぶり、そして前のめりになりながら体を地面に倒す。

「やったぞ！」

飛空挺ブレイズのデッキに歓声が沸きあだつた。

「やったのか・・・。」

ロイドもその巨体が倒れていく姿をコクピットの中でフリーユレと

一緒になつて見る。

「いやな予感がする……」

そうフリーユールがつぶやいた。

「え？」

聞き返すロイドに

「ロイド、テラメノムがまた……」

一度倒れはしたものの、テラメノムがまたゆっくりと体を起こした。そして、

グロオオオオオン、グロオオオオオン

テラメノムが口から衝撃を連続して打ち出し始めた。

「ロイド、来ますわ！」

マリアの声に、はっ、となつてロイドはその場から離脱する。後ろにいたTBが巻き込まれて爆発した。

「くそう、ロイド、やばいぜ！」

どンドン打ち出される衝撃に、ディノサウルも巻き込まれていく。

「これじゃあ敵も味方もないな……」

ポーンがその様子を見ていった。

ドオオン、ドオオン

よけきれない飛空艇が次々と火の手を揚げ、もしくはそのまま爆発していく。

あまりの衝撃の多さに、小回りが利くはずのTBそしてドラゴンたちもその餌食になつていった。

そして、とうとう奥に控えていた旗艦ブレイズに衝撃があたつてしまった。

「艦長、左エンジン損傷、エネルギーが低下、推移が保てません。」

「右ブロックに火災発生、このままでは爆発する恐れが……」

慌てふためくクルーに

「総員、ただちに本艦から退去せよ！」

飛空艇ブレイズからどンドン脱出用小型艇が出てくる。

マグナスは全員が退去したのを確認すると、全体通信を開いた。

「本艦はこれからテラメノムに向かって特攻する！」
するとその通信にクルーの割り込みが入った。

「艦長、脱出したのではないのですか？まだ間に合います！お逃げください。」

「時代が時代とはいえ、こうしてドラゴンとまた共に戦うことが出来た。ここで、逃げるようなことがあつては彼らに顔向けが出来ん

」
「しかし、艦長！」

「私はこの戦いをも届けることが出来ないが・・・それはお前達に任せる。皆、最後まであきらめるな！」

マグナスは残ったほうのエンジンを最大出力まで開放しテラメノム目がけ突っ込んでいく。

「マグナス艦長おー！」

飛空挺ブレイズはテラメノムの背中に激突をし、ものすごい爆発を巻き起こした。

ドゴゴゴゴオーン

テラメノムの体が爆発に飲まれ、爆風がロイドたちを揺さぶった。

普通の飛空挺と違いかなりの重量と大きさを誇る飛空挺ブレイズ号がぶつかったのだ。

誰しもがテラメノムへ相当被害があることは疑わなかった。

しかし、

グロオオオオオン

まるでそんな考えは甘いかというかのようには、テラメノムの衝撃が空をなぎ払う。

爆煙をのなかから姿を現したテラメノムは、あの爆発が嘘のように衝撃を撒き散らしながら前進を開始した。

「うあああああ、たすけてくれえ」

「くそ、援護はまだか？」

「弾の補充は今どこが担当している?!」

指揮を完全に失い、完全に混乱したTB部隊そして飛空挺にディノ

サウルとテラメノムの衝撃が蹂躪していく。

「こちら、飛空艇デア・ブルーグ号、マグナス艦長に代わり指揮を執る。各自持ち場にもどれ！」

しかし、完全に崩れてしまっただいま、立て直すことは不可能に近かった。

「にげるおお」

一人、また一人と、この混乱した戦場から逃げ出し始めた。

「ロイド、俺たちもそろそろやばくないか？」

ライの通信が入った。

「ロイド、もうここはやばい、逃げよう！」

ボーンからも通信が入る。

「でもそしたら、俺達のコロニーが……」

テラメノムと『ドウムスピーロー』の距離は後わずかもなかった。

「ロイド、このままだと私たちも危ないですわ。」

「ロイド……」

マリアの声、そして膝の上のフリーユレが不安げに見上げてくる。

離脱しようと転進する飛空艇がいる中、まだあきらめずに戦っているTBが次から次へと倒されていく。

「まだあきらめていない人がいるんだ……戦っているんだ……」

「

……親父、俺はまだあきらめたくない、どうしたらいいんだ……

・

目をつむるロイドの頭の中に父親の顔と、そして父とその仲間が歌っていたあの歌が流れる。

ロイドはその歌を、今の自分の想いととも口にした。

「宇宙を漂流し、この星に着いた俺達は

ドラゴンにもらった骨と人の血で作った

この剣を握り締め、ドラゴンと共に歩みだす

ドラゴンの鋭い爪ほど強くはないけれど、

空高く舞うあの姿のように気高くはないけれど

この二本の足で大地を踏みしめる

たとえ、進む道が血で染まり

希望を失い絶望の闇に包まれようとも

この背中に続く者がいる限り

死を振り返るな

悲しみを力に 想いを胸に

受け継いだ命で俺達が希望となり

引き継ぐ命のために、明日への道を切り開き突き進む！

それが俺達トライルブレイザー《開拓者》だ！！！！

「親父、いまなら分かる気がする。もうコロニーは駄目なのかもしれない。でも、今逃げたら、親父の残してくれたこの想いを俺は受け継ぐことが出来ない。たとえば、この戦いが負けなのだとしても、次に俺達の後に続く者にこの親父達の作った『ドウムスピーロー』に込められた想いを引き継ぐためにも、俺は最後の最後まであきらめず、そして戦い抜く！」

そして、

ロイドをはじめすべてのTBそして飛空艇、ドラゴンまでもが光り輝き始めた。

「いくぞぉ！」

ドオンドオンドオン

飛空艇から放たれたレーザーが今までにない威力でテラメノムを切り裂く。

「これでもくらえ！」

ライフルから放たれた弾が光の矢となって次々にディノサウルが打ち抜かれ、落ちていく。

ゴオオオオオオオ

ドラゴンたちの火球がディノサウルに、そしてテラメノムに降り注ぎ焼く。

しかし、テラメノムも黙ってはいない。次々に衝撃を吐き出して、TB、ドラゴン、飛空艇を巻き込んでいった。

「フリーユレ、巻き込んでごめん。」

膝の上に抱えたドラゴンの少女にロイドは謝る。

「ううん、あたしはロイドの傍にいたくてここまで来たの、だから・・・」

そしてぎゅっとガントレットの上からロイドの手を握る。

「わかった。一緒に行こう」

ロイドは背中からだんひらの剣バスターを抜き放ち正眼に構える。

「いくぞ！」

ロケットブースターを全開にしてテラメノムに向かって突っ込んでいく。

「ロイド、前方からテラメノムの衝撃が来ますわ！」

「く、よけられないな、レイ、どうだ？」

「ちよつとむりかな……」

「ここまでなのか……」

フリーユレは鎧の首元から自分のネックレスを取り出し、握り締め
「お願い、力を貸して……」

フリーユレの手から光があふれ出して、そしてそれはTB全体を包
み込んだ。

バシユウウ

テラメノムの衝撃をかき消し、そして上昇。光の中から現れたのは、
白いドラゴンの鎧をまとった黒いトライルブレイザー。その姿はま
るで、見たものがいたとしたら、みんなが口をそろえてこういつた
だろう、竜人と。

そしてその竜人はその何倍もある剣を上段に振りかざし、

「これでもくらええええ」

ロイドはその剣をテラメノムの頭にたたきつけた。

ドオオン

テラメノムはその体を真っ二つにされ、そして声をあげることなく、
大地に倒れたのだった。

「や、やったぞお！」

「勝った、俺達かつたんだ！」

「お父ちゃんは、コロニーを守ったぞお！」

次々に上がる歓喜の声。

テラメノムが倒されたのを見て、残ったディノサウルはちりじりに
逃げ出した。

「終わったんだな」

元の黒いTBに戻ったコクピットの中でロイドは上空からその様子
を眺める。

「終わりましたわね、早速ご馳走をといいたいところですが、この

「ままでは何も出来ませんわ。」

「そうそう、早くあたしらの体をロイドに作り直してもらわないとね！あ、でもマロンちゃん人形が粉ごなだあ。」

「忘れてましたわ、わたしのメルルちゃんも・・・あれだけでもギルドに避難させとくんだったあ！」

「プリンちゃん」

「マリアたちはお気に入りの人形が体と共に碎け散ったのを思い出し、嘆く。」

「マロン、メルル、それにプリン？それってもしかして『ゲツチュ
ー・フェアリー』ですか？」

とフリーユールの言葉に

「フリーユールも、知ってるの？」

「ええ、小さい頃見てましたし、お人形なら全種類三体ずつあるの
で、一つずつでよければ今度持ってきてますよ？」

「どうやらここにもマリア達以上の隠れた熱狂的ファンがいたらしい。
「まあまあ、それはすごく素敵ですわ。ロイド、早速体のほう頼み
ますわね！」

「やった、体も新しくなるし、人形ももらえるし、いいこと尽く
しだぜ！」

「大感激」

「喜んでもらえてうれしいです。」

「ったくお前達はよお。」

そしてコクピットにはみんなの笑い声がこだましたのだった。

そして明日へ

カンカンカン

「おい、その木材、こっちに持ってきてくれ」

「安いよお、安いよお！買っていつておくれよ」

あの戦いからすでに3週間が過ぎようとしていた。

ロイドはいつものように依頼を終えてギルドから出てきたところだった。

「だいぶ、元に戻ってきたな。」

その3分の1を失ったコロニー『ドウム・スピロー』はその傷跡を徐々に回復しようとしていた。

じつと目の前のモニュメントをロイドは見上げながら

「親父、あんたの想い、受け継いだからな。」

と、つぶやいた。

「ロイド！」

突然後ろから声をかけられた。

振り返ると、そこにはドラゴンの少女、フリーレが立っていた。

「フ、フリーレ!?」

「えへへ、驚いたでしょう。」

そういつてくるりと見せ付けるかのようにターンをした。

よくみれば、いつもの格好とは違い、白いワンピースに耳を隠すようにして帽子をかぶっていた。

「おかしいかな？」

「いや、とつても似合ってるよ。でも、どうして?」

「ほら、前に約束したでしょ? マリアさんたちの人形」

と、袋に入ったものをロイドに手渡した。

「ああ、あれか。」

マリアたちは、あれからロイドをせかし、元になるボディを中古で購入、リフォームしなおさせ、いまはすっかり今までどつりに、立

て直し中の家の脇のテントで家事をこなしながら毎日を送っている。

「あいつらもきつと喜ぶよ。」

「ねえねえ、ロイド、コロニーを案内してよ！」

とロイドの手を取って走り出す。

「お、おい、待てよ！」

ロイドもフリユールに引つ張られて小走りに走り出す。

そしてモニュメントは日の光を浴びて、そんな二人の未来を明るく照らすのだった。

そして明日へ（後書き）

最後まで読んでいただき本当にありがとうございました。

これでトライルブレイザー第1章は終わりです。

また少したって、読み返して修正を加えていくつもりです。

もしもよろしかったら、感想、ご指摘、評価などいただけると大変うれしいです。次の作品に活かしていきたいとおもいますので、宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3785q/>

トライルプレイヤー！

2011年4月18日21時51分発行